

【登場人物】

・パンダヒーロー
本名、ジョッシュ・ワイルダー。パンダの着ぐるみを着た暗殺者の少年。ロバートに雇われていたが別離を決意。

・ミミ
前金としてロバートからパンダヒーローに引き渡された少女。パンダヒーローとは相思相愛に。

・ロバート・クロス
悪名高い美貌の権力者。多方面から恨みを買っている。イーサンを追い出し、パンダヒーローに接近したが、失敗。元はイーサン共に貧民街出身だった。

・イーサン・カーター
ロバートの腹心だったが、別離。一見、冷静沈着な青年だが、実は傷つきやすく繊細な性格。

・ボブ・ヴィンスレット
ロバートとイーサンの部下。陽気な黒人の太っちょ。鋭い洞察力を持つ。ロバートに追い出されたイーサンと同居することを決める。

・リーズ・ドーキンス
ミミの元家庭教師。パンダヒーローとミミを探し回っていたが、無事再会。

【重要用語】

・シヴァ街
ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。ロバート、イーサンが暮らす。

・ヴィシユヌ街
三分の内の真ん中。中間階級の人々の住む街。パンダヒーローとミミ、ボブが暮らす。

・ブラフマー街
ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。ロバート、イーサンの出身地。

・ヴァルナ社
ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。ロバートが社長を務める。

【前回の粗筋】

パンダの着ぐるみを着た暗殺者として活躍するパンダヒーローことジョッシュ・ワイルダーは、ネオンライトタウンの支配者、ロバート・クロスに雇われ、彼の下で暗殺を繰り返していた。しかし、彼は前金として引き渡された少女、ミミと過ごす内に、冷酷非道なロバートに反抗心を抱くようになる。

ところがある日ジョッシュは、悪名を馳せるロバートとイーサンが実は貧民街の出身で、必死の努力の末に今の地位を築いたという事実を知り、二人に同情してしまう。そして、同じ暗殺者であるイーサンとも距離を縮める。しかし同居人であるミミは、冷酷にも自分を金銭にした二人をまだ憎んでおり、ジョッシュはロバート、イーサン、ミミの三人の間で揺れ動く。

ある日、ミミとジョッシュは外出先でボブというロバートとイーサンの部下に出会う。三人はすぐに仲良くなるが、ボブはロバートに反抗的なミミに、自分がロバートに救われた話をする。その話に、ジョッシュはますます葛藤する。

ところがある夜、パンダヒーローを呼び出したロバートは、彼の目の前で腹心のイーサンに暴力を振るって追い出し、さらにパンダヒーローに色仕掛けで迫る。その様子に、ジョッシュはショックを受け、再び激しくロバートを嫌悪してしまう。

一方、イーサンは暴力を振られたショックで精神的に追い詰められるが、そこをボブに救われる。同居の話を持ち掛けられ、彼はボブと共に新生活に踏み切ることを決意する。

ジョッシュが消沈する様子に、ミミはロバートへの怒

りを益々募らせる。ところが、そんな矢先、彼女はかつて自分の家庭教師だったリーズ・ドーキンスと再会する。リーズはミミに紹介され、ジョッシュとも知り合うが、そこで彼女は世間では彼を英雄視する人もいる。とジョッシュに伝える。消沈していたジョッシュは、その言葉に心を動かされる。そして、リーズは、彼にどういう訳か、「ロバート・クロスを殺してほしい」と一言依頼するのだった。

パンダヒーロー3 スパルタカス

こだま

ボブ・ヴィンスレットは夜が明けると、すぐさまその巨体を簡易ベッドから跳ね上げた。そして、傍らで猫のように丸まって眠っている人を揺すり起こした。

「カーターさん。起きてください」

やがて、短い呻きと共に黒い卷毛と端正な顔が、ボブの顎の位置まで持ち上がった。眠い目を擦りながら、イーサンはボブにっこりと笑った。

「おはよ」

ボブもまた、挨拶を返した。ところが、普段言いなれているはずの、「グッドモーニング、サー」という丁寧な言い方が、今では何となく照れ臭かった。

「ケガの調子はどうですか？」

誤魔化すように、彼は大胆にイーサンの頬に触れた。

温かな肌の奥に、固いしこりを手のひらに感じた。

「うーん、まだ固いですけど、でも昨日よりは引いてますね」

ボブは上掛けを跳ね除け、寝台を下りた。

「急ぎましょう。なるべく早めに出なければ。持っていくものは？」

イーサンは顔を赤くしながらシャツの襟もとを手繰り合わせ、静かに「ない」と呟いた。ボブは「そうですか」と簡単に答えると、せかせかと昨日の背広に着替え始めた。

「えーと、じゃあ、どうしよっかな。取り合えず後日色々揃えるとして、しばらく着替えは、うーんと、あ、親父のお古でも使えます？ ああ、親父は俺みたいに太っちゃいませんよ！ これは、あれです、母方の遺伝子で…」

「ああ、そっかそっか！」

イーサンが慌てた様子で遮った。

「ごめん、気を使わせちゃって！ そうだね、やっぱり着替えと現金はいくつか持つてく」

二人は準備が出来たら裏口の階段で落ち合うことにした。自室に向かったイーサンは、呆れるほどの速さで戻って来た。手に小さなトランクを持ち、肩で息をしている。

(きつと誰にも鉢合わせるまいとして走って来たんだな……)

と、ボブは気の毒に思った。

「行きましようか」

声をかけると、イーサンは安心したかのように笑った。並んで階段を降りている最中、イーサンが靴の先をひっかけ、ぐらりと上体のバランスを崩した。彼が転げ落ちる前に、ボブの手が素早く伸びて彼の手を掴んだ。身を持ち直しても、ボブは手を離さなかった。イーサンも指の力を緩めなかった。

「あのさ……」

イーサンがおずおずと呟いた。

「さっき言った、イデンシって何？」

ボブは思わず吹き出しそうになった。

「後で教えますよ」

手に力が籠った。銃の引き金で固くなったお互いの皮膚が強く擦れ合った。

「これからは俺が教えますよ」

ミミは紅茶の茶碗の中から匙を出して受け皿に置いた。その時にカチンという音がした。冷え切った音が、冷水のように空気に被さった。

ロバート・クロスを殺してほしいの

ミミは先ほどそう言った女性の顔をぼんやりと見つめ

た。彼女の顔は淡々として静かで、少し老けて見えた。

「殺す……？」

隣のジョッシュュが小さく呟いた。

殺す。

ああ、そう言ったんだな、とミミはリーズを見ながら思った。彼の声を通すと、何やら一風変わった響きに感じる。

「待つて……待つてください」

ジョッシュュが椅子からゆらりと立ち上がった。

「え、ちよつと待つてくださいよ……。殺すつて、クロスさんを殺すつて……」

「ええ、そうよ」

彼の手が震え始めた。厚い着ぐるみを通してでも分かるほどに。

「でつても、どうして……。どうして急にあなたがそんなことを……？ どうして……」

リーズは直も静かであった。しかし、静かというのは波も立たぬ心の静けさではなかった。爆発の一步手前、皮の下にある激しさを抑えに抑えたそういう断ち切れそうな緊張の膨張であった。

「あの人を何年も憎んできた……」

リーズがブツリブツリと話し出した。

「もう何年も……。私の一番輝かしい時期を全て賭けて。ずっとあの男にしてやることを考え続けた。これはね、ずっと誰にも話さず、胸の中に閉まっていたことなの」

ミミはリーズの動めく口唇を見つめた。段々、リーズではなく口唇だけが、自分の向かいに座って喋っているように思えた。

「もう何年も昔のこと。私にもね、一番幸せで、一番美しく、一番満ち足りていた時があった。生まれた時、

私には父も母も揃っていて、メイドも家庭教師も絹の帽子も持つていた。私の家はね、十九世紀の前半からこの地に続くイギリスの貴族の末裔だったの。ここがネオンライトタウンと名付けられる前から、この街を知っていた。いいところだったそうよ。ミシガン湖からの爽やかな風。黄金の小麦畑。そして思いやりのある街の人々。だけれどね、私の一族が持つていた広大な領地は、十九世紀後半に差し掛かると段々と東から移り住んできた人々に乗っ取られていった。輝いていた黄金の小麦の畑は、次第に工場から立ち上る灰色の煙に覆われていった。そして、穏やかで優しくかった昔の人々は消えていき、野心に目をぎらつかせた冷たい人々が増え、三つの区分も完成した。私の父はそう語ったわ。シヴァに陣取る金持ちには、私達のこと昔の人々のことも忘れ、贅沢に溺れ、ブラフマーの貧しい人々には目もくれなかった。でもね、私の父は諦めなかった。いつかまた、昔のように暖かい時代が戻って来る、選ばれた人だけでなく、みんなが幸せになれる時代が戻ってくるって、幼かった私に語っていた。私はね、そんな父の昔話で育ったの」

リーズは次第に頬の緊張を解いていった。

「没落貴族の令嬢なんてさんざん言われたけれど、あの頃の私は文句なく幸せだった。まだボブカットもひざ丈スカートもなかった時代、ハイヒール、長くて優雅な手袋、泡立つ波のような白いペチコート。ある物全てが娘だった私の心を躍らせた。でも、それよりもっと大切なものがあったの。それは父の昔話を実現させること。日曜日には必ずブラフマー街の子供達にパンを配って歩き、病気の人がいれば、代わりにお金を出してお医者様に見せた。そんな小さなことから、私達は始めて、夢を叶えるために奮闘した。お金が溜まったら、いつか孤児

院を立てて、身寄りのない子供達を救つてあげたい。従業員には仕事がなく困っている人を採用しよう。そんな夢を胸に抱えながら、私達は慈善活動を続けた。貧しくとも富んでいようと、才能があつてもなくても、誰もが笑つて暮らせる、そういう街を取り戻すこと、それが私にとつてドレスや帽子よりも大切なことだつた……。

そして一七歳になつたころ、私に婚約者ができたの。名前はロレンス・エベレット。八つ年上でシヴァ街の製薬会社の社長に就任したばかりだつた。彼は自信にあふれ、そして何よりも優しい人だつたわ。父や私の活動に深い理解を示してくれて、結婚したら一緒に慈善活動をもっと広げることを約束してくれた。あの時が幸福の頂点だつた。確かに、彼とは縁談で知り合つたけれど、私は彼の飾り気のない性格に惹かれていた。彼だつて私を思つていたわ。結婚して、子供が出来て、孤児院の子供達にも大勢囲まれて……。そんな幸福な夢があと少しで叶う所だつた……。でもね」

リーズの声が途端にくぐもつた。
「でも、とうとう何もかもおしまいになつた。あの男、ロバート・クロスのせいで」

「クロスさん？」
「ミニが小さく口を挟んだ。ちよつとだけ、本当に驚いたかのような声で。」

「ええ、そう。そのクロスさんよ」
リーズが低く答えた。

「私が初めて彼に会つたのは、私が十四の時だつた。父がまだ細々と経営していた農地の、その残りまで買い占めようと、先代のヴァルナ社の社長が交渉に来たの。その男に肩を抱かれて、居間に立つていた男の子がいた。まだ十七歳だつたロバート・クロスよ。当時の彼の美し

さと言つたら、もうそりやあ言葉にできないほどだつたわ！ 私も美人の部類に入る方だと自覚してはいたけれど、彼の美しさは私なんて大したものでもないんだとまざまざ実感させるくらい、圧倒的なものだつた。社交界に出て、花のような令嬢とたくさん言葉を交わしたけれど、やっぱり彼ほどの美貌を持つ人は一人としていなかったわ。深い窓に守られているような、そんな弱い美しさじゃなかった。彼の美しさは、厳しい年月に研磨され続けた、荒々しく鍛え抜かれたものだつたの」

リーズは顔を両手の中に埋めた。華奢な肩がブルブルと震えていた。
「だから、私は勝てなかつた。女の私より、男のロバート・クロスの方が格段に美しかつた。それがあの不幸の発端にもなつていた。」

ロバート・クロスが次のヴァルナのトップになつたのは三年後だつた。先代がいわゆる「急死」してね！ 誰の仕業かはすぐにわかるでしょうけど。ロバート・クロスはトップに咲くや否や、すぐに新しいビジネスに着手したわ。ちよつとあの時はね、世界大戦が激化している所だつた。彼はその戦争を利用したの。鉄鋼を連合側に売つてポロ儲け。だけど、人間何かを始めると次々に欲が出るものね。彼はそのうち鉄だけで満足ができず、なんとあの非人道的な毒ガスに目を向け始めた。ドイツのフリッツ・ハーバーが開発したものよりもつと殺傷性があるものを手に入れ、売りつけようと目論んだのよ。そこで標的にされたのがロレンスだつた。毒を作るには薬をよく知る人が必要だつたし、何よりロレンスは大学時代にドイツ留学をして、ハーバー教授に師事した経験があつたの。ロバート・クロスは何とかしてロレンスを引き入れようと、足繫く彼の下へ通つた。もちろんロレン

スは何度も断つたわ。だけど、ロバート・クロスは巧妙だつた。ロレンスはまだたつた二十五歳。経営者としての日も浅く、頑固な思想もなく、尚且つ薬の新しい知識が豊富で扱いやすい。彼が他の製薬会社を蹴つてロレンスに執着したのはそういう理由からだつた。そして、若いロレンスは見事に引つかつた！ 彼は段々、官能的で美しいロバート・クロスに夢中になつていった。ロバート・クロスが一言、『やつてごらん、きつと上手くいくから』と囁けば、彼は頑として疑わなくなつた。そして彼は、大切に溜めていたお金を次々と使い潰して毒ガスの生成を始めた。私が必死に止めても彼は聞かず、おまけに私の実家のお金にまで手を付け始めた。『僕がやつてゐることは正しい事なんだよ、分かつておくれ。君はただ黙つて僕の言う通りにしていればいいんだよ』電話を掛ければそう言うだけ、手紙を書けばそう書いて送り返すだけだつた。私の誕生日も、クリスマスも、二人だけの秘密の記念日も、彼は忘れた。ただ、売上金の話し合いのついでに、ロバート・クロスの肌を味わうためだけに生きてゐるかのようだつた。ヴァルナ社は急成長し、ロバート・クロスは最高の栄華を極め、ヨーロッパや中国、オスマン帝国では休まない戦いが続き、アメリカも戦渦に巻き込まれた。彼の栄華の裏でたくさんの方が死に、やがて戦争は終わったわ。そこで、ロレンスはようやく間違いに気づいた。あまりに遅い気づきだつた。それでも、私は構わなかつたの。いつからだつて彼とやり直す自信はあつたから。でも……でもね、彼は私とやり直そうとは思わなかつた。苦しみに耐えきれず、首をつて自殺したの」

リーズは顔を覆う手を、まるで何かを掴みつぶすかのように曲げた。

「あれで何もかもお終いになった！ 電報をもらって急いで彼の下へ向かったわ！ 私が見たのは、ただ天井からぶら下がった死体、それだけ！ 私に当てた手紙も遺書も何もかもない！ 優しい街も孤児院も結婚生活も何もかもなくなった！ 父や母さえも、失意のうちに死んでしまった！ 後に残ったのは私だけ！ 私だけこの街に独りぼっち！ 私だけ！ ロレンスの死も、両親の死も、私は十分に悲しめなかった。あるのはただ、身を焼くような怒りだけ！ あの男！ あの男さえいなければ！ そして私は、残りの人生を捧げてあの男に復讐し、自分の意志を貫くと誓ったわ。そのために、あの男に近づくとチャンスはずっと窺っていた。そしてついにやってきました！ あの男が従業員を募集していると聞いて、私はすぐに食いついたわ！ そして見事採用された！」

リーズはそこで一つ呼吸を置いてポツリと言った。
「それが家庭教師の仕事だとは、少し意外だったけど……」

彼女がしばらく何も言わないのを見て、ジョッシュが口を開いた。

「そんなことがあったんですか」

「あんまりだわ……」

ミミがふつと呟いた。呟いた後でさつと口を手で覆った。リーズはそつと、彼女に目を向けた。

「信じられないでしょう。でも、あの人はやってのけたのよ」

「それであなたは彼にそれほどの恨みを……」

ジョッシュが口を挟んだ。

「ですから、俺にロバート・クロスを殺せというのですね」

「いいえ！ 少し違うわ！」

リーズが卓の向こう側から身を乗り出した。

「私があるに頼んだことは、何も一人の恨みを晴らすだけのものではありませんわ！ それだけだったら、私はいつでもあの男の寝首を掻けましたもの！ そうしなかったのは、もっと大きな目的があったからです！ ただ殺すだけではダメ。あの男の死には、もっと大きな意味を持たせなくてはならない！」

リーズの白い手が、ジョッシュの着ぐるみの手に躍りかかって掴んだ。

「汚職や売春や血や鉄で暴利を貪る頂点を、永遠に消さなければならぬわ！ 私は怒りに駆られながらも、これだけは忘れなかった。父やロレンスや私が目指していた、人が肩を並べて笑える、そういう街を取り戻すこと。そのためには権力のレースをおしまいにしなければならぬわ！ だからこそ、ロバート・クロスは死を大きく大胆にするの！ この街の人々が団結し、優しく強いリーダーの下で彼を、そしてヴァルナを終わりにする。そのリーダーこそが、バンダヒーロー、あなたなのよ！ さつきも見たでしょう、たくさんの人々があなたを革命の先駆者として見ている。私も確認したわ。あなたはあの男に金銭として利用されたミミを大切にしている。人を人として大切にしている、そういう心の持ち主だと。だからこそ、あなたはこの街を正しく導いて行けるわ！ あなたなら、みんなが望んでいる世界を取り戻せるのよ！ ロバート・クロスの手足で終わる器ではない、あなたはみんなが渴望するエロイカなのよ！」

ジョッシュは声の震えを隠さなかった。
「あなたは、革命を起こすつもりですか」

「いいえ」

リーズが答えた。

「起こすのはあなたよ」

ジョッシュは顔を下に向け、深くため息をついた。その様子は、まるで年月の摩擦ですり減らされた老人のようだった。

「ミス・ドーキンス。あなたのお話はよく分かりました。それからあの人のことも……。でも、そんなことあまりに急で……。その、俺にはやっぱりすぐには……。決められません」

「確かにそうね……」

リーズが掴んでいた手を離した。顔から激しさが引いていた。

「ごめんなさい、初対面で話すようなことじゃなかったわね。もう少し日を置けばよかったです。とにかく、ずっと探していたあなた達が見つかって嬉しくて……。つい先走ってしまったわ」

彼女が立ち上がって外套を着始めた。そして、留め具に指を掛けたまま、悩まし気な眉尻と共に、ジョッシュを見下ろした。

「ミスター・バンダヒーロー。ゆっくりで構いませんわ。

決断には時間がかかりますもの。でも、自分の手中にある力を忘れないで。その力の使い方も」

「リーズ先生」

ミミが立ち上がった。リーズは留め具から手を離すと机を迂回し、彼女の前に膝を付いた。

「……」

と、優しく呼んだ。

「大丈夫よ。怖い事なんてないわ。ここはあの塔の中じゃないんだものね。あなたの言う通り、いいところね。今日はあなたの顔が見れて嬉しかったわ」

「また会える？」

「もちろんよ、時々会いに来るわ。あなた達二人の甘い生活を邪魔しないくらいにはね」

リーズはそつとミミの前髪を撫でると、静かに立ち上がった。そして最後に、強い意志の籠った瞳でパンダヒーローを見つめて言った。

「最後に、ミスター・パンダヒーロー。私は綺麗、ことを言ったわけではありませんからね。ロバート・クロスやイーサン・カーターが、どれほどの貧しさや苦しみを味わってきたか、私は十分に知っています。知った上で、お願いしているのですからね」

リーズが帰った後、居間にはミミとジョッシュだけが残った。ジョッシュは着ぐるみを脱ぎ、少年の瑞々しい姿で長椅子に座っていた。唇から漏れる吐息は震えていた。

「エロイカだなんて……」

そう、ミミを見つめて呟いた。

「英雄だなんて……。俺がそんな風に思われてたなんて、正直信じられないよ……」

「なぜ？」

ミミは彼にピツタリと寄り添って座った。

「私には最初っからそうだったわよ。あなたは最初っから、私にとつては英雄だったわ」

その言葉に、ジョッシュは彼女の手を握って返した。

その手が、ほんの少しだけ震えていた。

「ジョッシュ……。怖いのか？」

「だって……」

ミミの手から、ジョッシュの手の骨の感触がしんしんと沁みとおつた。

「分らないんだ……。君やカーターさんに酷い事をし

たあの人はもちろん嫌いさ。だけど、だからと言ってミス・ドーキンスのように殺したいほど憎いかと言ったらそうではない。あの人をどうしたらいいのか、分からないんだ」

「カーターさん？ カーターさんにした酷い事って？」

「あの人はね、俺に媚びるためにカーターさんに暴力を振るって無理矢理追い出したんだ」

ミミが押し黙った。ふつくらとした白い頬に、怒りでさつと朱が走った。ジョッシュは、彼女が自分のために怒っていてくれるのだ、と感じ取った。

「ミミ。俺は今、どうしようもなく怖いよ。ミス・ドーキンスからの依頼を受ければ、俺はただの暗殺者じゃすまなくなる。もつと大きな存在にならなきゃいけなくなるんだ。それが俺にできるのか……」

「ジョッシュ」

ミミがひと際強く、彼の手を握った。

「例えあなたが何になっても、私だけはあなたの味方よ。私だけは……」

壁の暦の赤印も、もうすっかり前半の部分を埋め尽くしている。冬の最も寒い時期が訪れたのは、その暦からも窓を鳴らす北風の音からも分かる。

イーサンは、作業する手を止めてぼんやりと暦を眺めた。

ああ、もう二週間が経ったんだ。

ヴィンスレット家に住まいを移してから、時間の流れなどすっかり忘れていた。それほどまで、この家とヴィンスレット家の人々は心地の良いものだった。

ボブ・ヴィンスレットの母親、モナは息子に似た巨体

で、且つ同馬越を上げながら台所を闊歩する快活な女性であった。ボブが言っていたイデンシとは、どうやらこれであるらしい。

対して父親のブライアンは、スレンダーで整った顔立ちの優男風で、シカゴの会社で働いていた。

妹のトレイシーは、年は十一歳と幼いながらも、素晴らしい美少女だった。彼女は、こつそり読んだ母親の婦人雑誌に載っている恋愛小説のヒロインを真似して、近所の男の子という男の子をすっかり骨抜きにしたおませな女の子で、自分の彼氏候補もまたマせていた。トレイシーは、倍以上も年上のイーサンに一目で恋をしてしまったらしく、自分のお気に入りの男の子リストの一番上に、彼の名前を書き加えた。

そして祖母のマギーは、家族連中の喧しいドタバタ騒ぎを、揺り椅子の上から静かに微笑して見つめている、優しい老女だった。柔らかい茶色の瞳は、長い年月が育て上げた穏やかさと貫禄を物語っていた。

彼らは、突然にして住まわせてくれとやって来た、この素性も分からぬ男をすんなりと受け入れ、イーサンはわずかに二週間で六人目の家族となった。彼らは明るく快活で、それでも厚かましい面は少しもない、礼節のきちんとした人徳者で、イーサンは彼らとの新生活に難なく順応した。マギーが語るダホメ王国の昔話も、塩気の強い豚の臓物煮込みも気に入った。

彼らは何くれと世話を焼いてくれたが、やはり厚意に甘えるばかりではイーサンも気が引けた。

何か仕事をしなくては。

そう考えて、ふとイーサンは、自分が手芸を得意にしていたことを思い出した。もう何年もやっていなかったもので、腕が衰えていないか心配だったが、試しにトレイ

シーのためにオズワルドの縫いぐるみを縫ってやったところ、モナにその出来栄を大変評価された。それからモナの紹介で、彼女が務めるシカゴの洋裁店から仕事を分けてもらえるようになったのだ。

今夜も、イーサンは依頼品であるワンピースに取り掛かっている最中だった。机や椅子を全て部屋の脇にどけ、床一ぱいに布を広げて縫って裁つ。イーサンは店で仕事をやるよりも、自分の部屋で気ままに裁縫をする方が好きだった。何しろ、店ではお針子の若い娘達がイーサンを取り合って殺伐とした空気が四六時中流れているので、当然と言えば当然の結果だった。

暦から目を離すと、イーサンは再び床に広げられた布に屈んで鉄を宛がった。ターコイズ色の布が、次第にワンピースの形に変化していく。急がなければ、後五日でこれを完成させねばならない。

これ以外にも、イーサンはたくさん依頼を抱えていた。彼の腕と、美しい顔立ちのどちらのおかげか定かではないが、女性客のほとんどが彼に仕立てを頼んだ。そして、新しいドレスを渡す度に、彼女達は幸福そうな笑みを浮かべるのだった。

(あの人は、俺が人を殺していたことを知らないんだ。あのドレスを縫っていた手で、銃の引き金を引いていたことを)

固い裁ち鉄が一步進むたびに、胸がヒリヒリと痛んだ。ボブは家族に、自分を「イーサン」だとは伝えてくれたが、あの「イーサン・カーター」だということは伏せてくれた。職場もネオンライトタウンの外にあったし、自分の顔が割れているシヴァ街にはあれから一度も行かなかった。そのため、「あのロバート・クロスの右腕、イーサン・カーター」がヴィンスレット家に住んでいるとい

うことは、ボブとイーサンしか知らなかったのだ。イーサンはそっと鉄を動かす手を止めた。すべすべとした生地に指の腹を何度も滑らせた。

「いやだ、ロバート！ 絶対にいやだ！ どこかへ行くなんてできねえ！ これ以外の生き方なんてなんも知らねえ！ お前はなんにも教えてくれなかった！ 教えてくれなかったのに！」

あの夜、冷たい目で自分を見下ろしていたロバートに、必死にこう叫んだ。殺し以外の生き方なんて、知らないと思っていた。ロバートと一緒に居なければ、生きてはいけないと。

だけど、そんなことなかった。イーサンは寂しく笑った。

殺しをやらなくなつて、洋裁で食べていけるようになった。ロバートがいなくなつて、暖かく接してくれる家族だっている。俺はちゃんと、真つ当に生きていけるじゃないか。

イーサンは視線を、布から窓枠の下にどかした机に向けた。その上には、書きかけの手紙が一枚乗っていた。

「パトリックへ」

手紙はたどたどしい文字で、こう始まっていた。

「この前、ロバートの所を離れました。殺しもやめました。今は、部下だった人の家に住んでいます。仕事も見つかって、みんなと仲良く暮らしています。今までいっぱい心配かけてごめんなさい。前みたいにくさんは稼げないけれど、あなた達に渡すお金は毎月きちんと用意します」

まるで小学生が書いたような稚拙な手紙だったが、読み書きが苦手なイーサンにはこれが精いっぱいだった。窓から漏れ出る街灯の光を受けて、手紙が光る。

(パトリック)

イーサンは胸の中で呼びかけた。

(もし俺がもう少し早く気づけていたら、何か変わっていただろうか。違った未来があったらどうか)

つと、頬に鈍痛が走った。あの時殴られた時の傷はすっかり治つたが、今でも痛みだけがじくじくとそこに残っていた。

(それとも、やっぱり何も変わらないだろうか。今俺に優しくしてくれる人も、俺の正体に気づいたら何と云うか分からない)

イーサンはロバートを思い出した。赤ん坊の自分を、痩せた胸に抱いて空腹に耐えていたロバート。友達と一緒に映画を見てはしゃいでいたロバート。あの夜から、何日も何週間も泣いて過ごしていたロバート。そして、自分の髪を乱暴に掴みあげたロバート。あの時の、無感情な彼の瞳。

突然扉が開き、ボブが顔を出した。イーサンは急いで前掛けの紐を解いて笑った。

「お帰り」

「ああ、たがいま。行こうぜ、飯だつてさ」

ボブが笑って答えた。

二人は家族と夕食を済ますと、ボブの寝室に引き上げた。ボブの部屋は、寝室というより図書室のようだった。壁の三方面を、ぎっしりと本の詰まった棚が覆いつくし、溢れ出した本が床に積み上げられていた。そのいづれも、シェイクスピアやルソーやダンテ、ボツカチオなどの高尚で難しい書物はかりだった。書物は欧州のものだけに留まらず、ウマル・ハイヤームの『ルバイヤート』だっ

たり、羅漢中の『三国志演義』だったり、紫式部の『源氏物語』だったり、書物だけで世界を征服しているようだった。読み書きが苦手なイーサンにとっては、正気の沙汰ではない部屋だ。ヴァルナ社の書齋もそれなりに立派なものだったが、ボブの部屋はそれにも劣らないだろう。

二人はいつものように小卓の前に並んで座った。ボブは本を広げて読みふけり、イーサンは依頼品のスカートの裾に刺繍を施し、時々卓上の紅茶に口を付ける。こうして、二人で静かに眠気が訪れるまでのんびりと過ごすのが、イーサンの取り分け好きな時間だった。

美しい幾何学模様を縫い付けながら、イーサンは首を伸ばしてボブの手の本をチラリと見た。本の表紙には、『自省録』と書かれている。以前、おもしろいから読んでみると貸してもらったものの、僅か三行読んでリタイアした本だ。

「おもしろい？ それ」

と、彼は少し八つ当たるようにボブに言った。

「え？ まあ、読む価値はあるとおもっせ。おもしろいかは人それぞれだと思っけど」

「君がおもしろいかって聞いてんの」

「ああ、俺？ 俺は結構おもしろいと思っよ」

「ふーん」

弛んだ糸を強く引つ張って、イーサンは唇を失わせた。

「俺はそういうの嫌い。気取ってんだもん」

これほどまで近くに座っているボブと自分が、まるで『自省録』によって遠く隔てられているように感じた。

「どうせ俺は、せいぜい『ロミオとジュリエット』が何とか分かるレベルだよ」

「何だか機嫌悪いな、お前。まあ、そう食わず嫌いする

なって。先人の声に耳を傾けるのは大事なことだぜ」

イーサンはしばらく黙り込んだ。縫い目を一つ飛ばしたのか、布から針を引き抜いている。豊かな黒い前髪の奥の瞳が、厳しい色に濡れて光っていた。

「ロバートも、それを読んだ」
やがて、静かに呟いた。

「あの、書齋でさ、『自省録』だけじゃない。『ハムレット』も『純粹理性批判』も『論語』もなんだって読んだ。若いあの人には、とにかく知識が必要だったから。でも、そんな立派で偉大な先人の言葉を読みふけりながら、あの人は一体何を考えてたんだろう」

刺繍を再開しながら、イーサンは呟き続けた。誰に向かつて話しているのかは分からなかった。

「あの、遅くまで毎日勉強してさ。十歳になるまで読み書きも碌に出来なかったのに、たった十年で大卒のインテリにも劣らないくらい知識を身に着けたんだ。でも、手に入れた知識から何かを学ぼうとはしなかったのかな。あの人は何かをため込むだけで、使うってことをしなかった。そんなこと、誰も教えてくれなかったもの」

イーサンはそっと、頭をボブの肩の上に乗せた。柔らかい卷毛が、ふわりとボブの頬に触れた。

「二十六年。それだけ長くあの人のそばにいたのに、まだ分からないことがたくさんある。冷え切った書齋で難しい本を必死に読みながら、あの人が何を考えてたのか、今ではさっぱり分からない。ただ、一つだけ分かるのは」

柔らかい瞼が、パチリと開いた。

「悪事つてのは、やろうと思ってやるものじゃないってこと」

「イーサン」

ボブがイーサンの肩に腕を回した。力強い手だった。「お前はもうロバート・クロスとは何ら関係のない身だろ？ そんなに思いつめるんじゃない。今、自分の前にある物を見ろよ」

「分かっているよ。でも何だか……」

イーサンはそれ以上何も言わなかった。ただ、灰色の瞳を寂しさと不安で濁らせるだけだった。その瞳に、ボブは突然腹が立った。ロバート・クロスの優美で官能的な顔が、自分をバカにして嘲笑っているように感じられた。

「旦那様は、権力を手にする器じゃないだろうさ」

「どういうこと？」

イーサンのあどけない問いに、ボブはムっと唇を引き結んで答えた。最近、彼は恩のあるロバートに反抗心を抱かずにはいられなくなっていた。

「あの人は権力の使い方がヘタクソなのさ。貧しい生まれからスタートして、権力を掴む所までをゴールにしちまってるおかげで、その権力をどう使ったらいいか考えなかったんだ」

「うん」

イーサンは小さく頷いた。

「知ってる」

「それに、まだ腹の立つことがある。あの人はお前にひどい暴力を振るいやがった。その謝罪を聞かぬ限りは、俺は絶対にあの人を許さねえ」

イーサンが見る見るうちに赤くなった。そっと、彼から体を離すと、また縫物に専念し始めた。ボブの方も、言つてのけてから突然恥ずかしくなり、読書に集中するフリを始めた。

今からトレイシーがピアノを練習する音が聞こえてく

る。その、可愛らしく跳ね飛ぶ音を聞くと、ボブは突然自分が恥ずかしくなった。

(許してくれよ、トレイシー)

ボブは、毎夜恋の成就を願い、月に向かってお祈りをする妹の姿にそっと謝罪した。

「ボブ」

イーサンがふと思いついたかのように言った。顔から赤みが引いていた。

「もし、ロバートが権力を使いこなせる器でないとしたら……なら、パンダヒーローは？ 彼はどうなの？」

「パンダヒーローか……」

ボブは、あの昼下がりのレストランを思い出した。滑稽なパンダの着ぐるみ。見えない素顔。そこから聞こえてきた。細く柔らかく、瑞々しい若い声。

「彼は若かった」

ボブはそれだけ言った。そして言い換えた。

「アイツは子供だった」

イーサンはそれ以上追求しなかった。玉結びをした糸の端を、白い歯で噛み切った。

「やっぱ俺、大して何も分かってないみたい」

二人はしばらく、トレイシーのピアノの音を聞いている。一言も口に出さないで、トレイシーが毎度同じフレーズの始まりで音を外すのが分かった。妹の愛らしいピアノの音に、ボブは少し気を緩めた。

「そう言えば」

何の気もなしに、ボブはイーサンに喋りかけた。

「この前、パンダヒーローと一緒にお嬢様、じゃなくてミミに会ったぜ。前金として貰われたっていう割に、随分と幸せそうだったよ」

「あ、痛っ！」

イーサンが短い悲鳴をあげた。ボブが驚いて見ると、彼は大きな瞳を皿のようにして、血の玉の浮く指先を見つめていた。手が急に震えたせいで、針で突いたらしい。イーサンの中の睫毛の縁から、涙がにじみ出ている。

ロバート・クロスはすっかり疲れ切っていた。もう何日も、タイプの上で指を動かしている。あちこちに電話をかけ、電報を送り、書類に苦心しながら直筆署名をし、帳簿の金を何十回も確認する。時々、気難しい顔で煙草を吸いながら、何十通もの手紙を何度も書き直す。快く応じてくれた所へ出かけ、ひたすら頭を下げる。

そのような日々を二週間ほど送り終え、彼は「疲労回復と気分転換」と称し、「鹿の園」という高級娼館から、彼が長年愛人としてきたヴァイオレット・ディケンズという娼婦を呼び寄せた。

自分が同じような立場にありながら、ロバートにも女の愛人がいた。しかし、ロバートとヴァイオレットには、所謂男女の関係というものは欠片もなかった。

もとより、ロバートには女の愛人を作る気はなかったのだが、ヴァルナ社のトップは「鹿の園」から馴染みの娼婦を必ず一人は持つという伝統があり、彼も嫌々それに従ったのだ。かくして、「鹿の園」の御職であるヴァイオレットをロバートが、二枚目のヴァレリアをイーサンがもらい受けることとなったのだ。しかし、嫌々とはいながらも、ロバートは結構ヴァイオレットを気に入っていた。彼女の思いやり深く、理解があり、さっぱりとした性格を、ロバートは好ましく思っていた。かくして二人は男女ではなく、仲のいい友人か姉弟のように、大半の夜を寝台ではなくチェスのテーブルの上で過ごした。

ロバートは意外なことに、今まで女性と関係を持ったことは一度もなかった。また、彼自身も持とうとは思わなかった。その理由を知る者は、ヴァイオレットとイーサン・カーターの二人だけであった。

電話をかけてから二時間後、ヴァイオレットは指示通り、ヴァレリア・デュヴィーヌを伴って書齋に現れた。ロバートは二人をにこやかに出迎え、酒のボトルを何本も開けた。

「今夜はどうにも調子がいいこと」

ヴァイオレットは怪訝そうな顔でグラスに口を付けた。グラスが傾くと、虹色の光が彼女の黒い手袋の上に飛び散った。

「で、今日は一体何の御用？ ただの気分転換で呼んだじゃないんでしょう？」

「すつごい。君は相変わらずなんでも分かるね」

ロバートは機嫌よく笑って言った。その様子はまるで姉に褒められた小さな弟のようだった。

「確かに、電話では『気分転換がしたくなった』と言っただけで、本当は重要な話があつて呼んだんだ。実は、もう君達を公式愛妾から外したいと思ってる」

ヴァイオレットは静かに頷いた。しかし、傍らにけるヴァレリアははつちりとした目をさらに丸く見開いた。薄青い目が驚きでふると揺れた。

「それじゃ、イーサンもあなたも、もう私達に金銭的援助してくれないという訳ですわね？」

「ええ、そうです。もう君はイーサン・カーターの愛人という肩書きを捨てられるんだよ」

「これは……イーサンも承知のことですか？」

「ああ、イーサンか」

ロバートはグラスの飲み口を舐めて言った。

「あいつはここから出て行った。つまり、ただの一般市民になったって訳さ。だから、君に援助をする余裕はない。あいつに了承を取ったわけではないが、明らかに君を愛妾にし続けるのは無理があるだろう」

「え……出て行ったって……じゃあ、彼はどこにいますの？ 一体あの人、どこに行きましたの？」

「さあ、居場所は俺にも分からない」

「やめときなさい、ヴァレリア」

ヴァイオレットが優雅に口を挟んだ。

「あまりお客のことに首を突っ込むんじゃない。この人がもう援助できないと言うのなら、それに黙って従って、次の手を考えればいいだけよ」

「ありがとう、ヴァイオレット。君はやっぱり話の分かる人だ」

ロバートがそつと彼女の手を取った。優しく労わるような手つきだった。

「今まで世話になったが、あなた達とはこれでお別れだ。今までのような援助はできないが、最後に礼金として二万ドルを用意させてもらおう。新しいパトロンを見つけて娼婦を続けるのもよし、この礼金で何か新しい仕事を始めるのもよし。後のことは君達にかかっている。それから」

ヴァイオレットの手を取るロバートの手に、ぐつと力がこもった。

「これからは得のする方につくこと。誰がこれから勝者になるのか、それを見極めて行動してほしい。それだけは忘れないで」

「ロバート」

ヴァイオレットの手が、ロバートの手に重なった。

「ちよつといいことを教えようか」

にやりと笑ってロバートは椅子に掛け直した。足を組

み、子気味よく彼は話し始めた。それは、このビルの構造についてだった。どこをどう行けばどこに着くか、そこを行けば近道になるか、彼はペラペラと喋り、その様子をヴァレリアは怪訝そうに見つめた。

「えつと……ビルの間取りがそんなにいいことなんですか？」

「もちろん」

何気ない質問にケロリと返され、ヴァレリアはしかめつ面で首を捻った。

(お酒にでも酔ってるのかしら、この人)

「なるほど、よく分かったわ」

対してヴァイオレットは心得顔で頷いた。ヴァレリアは彼女にもしかめつ面をしたが、彼女はただロバートだけを見つめていた。

「でもあんたは……」

静かな細面の顔にさざ波のように歪みが広がった。ロバートを映す黒い瞳が濡れて光った。

「これでいいの？」

ロバートは穏やかな表情を浮かべていた。

「うん」

微笑して言い、彼はヴァレリアの方を向いた。

「ヴァレリア」

呼びかけられ顔を向けると、どんな高名な聖母像にも劣らないほど、美しい顔が自分を見つめていた。

「心配しないで。きつとうまくいくから」

ヴァレリアが相変わらずのしかめつ面で頷こうとしたその時だった。いきなり、書斎の扉が乱暴に開き、巨体

で黒い肌の青年がズカズカと入り込んで来た。

「ちよつと！ ノックもありませんの!!」

ヴァレリアがしかめつ面を青年の方に急いで向けた。

しかし、彼はまるでヴァレリアなど目に入らないかのようになり、肘掛け椅子にかけるロバートの方だけを見た。

「どうした、ヴィンスレット？ ん？」

ロバートは彼の非礼を咎めることなく、軽く彼に問いかけた。

「ふん、どうした、ヴィンスレット、だなんて気取った物言いしやがってさ。俺はそのグラスを下げに来ただけですよ」

「お前ね、あまりメイドの仕事を奪わないでくれるか？」

「今日だけ、ミリーさんに頼んだんですよ。あんたに言いたいことがあってね」

ボブは、グラスには一切手を付けず、ギロリとロバートを睨みつけた。ヴァレリアは、ボブのこの無礼な態度にロバートがいつ怒り出すか、冷や冷やししながら二人を見つめた。

「あれだけのことでかしておいて、ご自分は優雅に綺麗処とお酒盛りですか。いい御身分なもんですね、クロスさん」

「はあ、あれだけのこととは？」

「とぼけんじゃねえ！」

ボブが激昂して、小卓を拳で殴りつけた。傍らのヴァレリアが驚いて「きゃあつ！」と悲鳴を上げる。

「あんたは、イーサンを殴って散々傷つけたじゃねえか！ あの日の夜、あいつがどれだけ泣いたか分かってんのか!! なのに、あんたはあいつに謝りもせず、女とチャラチャラやりやがって！ ふざけんじゃねえぞ、こんちクシヨウ！ よくも、俺の、俺のイーサンを！」

「俺のイーサン？」

無表情にボブを見つめていたロバートの顔に、見る見るうちに笑みが広がった。フルフルと肩を震わせると、

突然薄い腹を両手で抱えて笑い出した。

「はーっ、そういうことか！ つまり、アイツは君の所にいるんだな！ なるほど、なるほど！ こりや傑作だ！ あの甘ったれたガキはネズミのように君の所に転がり込んで御厄介になつてると！」

「なっ、ネズミだつてえ!! テメエ、バカにするのも大概にしやがれ！」

「あれ、そんな乱暴な口の利き方して！ 私への恩はもう帳消しかい！」

「あつたり前だ！ 俺はイーサンのためなら、大恩あるテメエにも牙を剥くんだよ、覚えて置きやがれ！」

「待つて、待つてくださいませ！」

涼やかな声が二人を突然止めた。見るとヴァレリアが上下の脛から零れ落ちんばかりに瞳を潤ませてボブを見つめていた。

「じゃあ、イーサンはあなたの所にいますのね！ あなたの所に行けば、あの人に会えますのね！」

「あなたに教えなきゃならん義理はありません！」

ボブは冷やかに彼女に答えた。その様子に、ヴァレリアのつぶらな瞳がキツとつり上がった。

「まあ、そんな言い方ないんじゃないかと！ 私、イーサンには随分とお世話になりましたのよ！ お別れを言うくらい許されるはずですよ！」

「お世話？ じゃあ、あなたがイーサンの愛人のミス・デュヴィーヌ？」

そう呟くと、ボブはたちまち瞳の端を釣り上げた。その瞳が、見る見るうちに嫉妬の炎で燃え上がるのを、ロバートは見た。

「なら尚更アイツには会わせられませんな！ アイツはもう普通の世間の人間なんだ！ 商売女なんか会わせ

てたまるもんか！」

「なっ、商売女ですつて!!」

「何か間違つていますかな!! 何がお世話だ、綺麗ごとぬかしやがつて！ どうせイーサンの他にも男がいるくせに！」

「言いやがつたな、テメエ！」

突然、ヴァレリアの薔薇色の唇からとんでもなく汚い言葉が飛び出たかと思うと、白い手が伸びてボブのシャツの襟もとを勢い良く掴み上げた。さすがに驚いたのか、ボブがひゅつと息を詰まらせた。

「この野郎！ こっちが下手に出ればいい気になりやがつて！ アタシが女だからつて舐めたマネをするんじゃないねえ！」

「ヴァレリア！」

ヴァレリアの乱暴な言葉を、冷え切った水のように引き締まった声がピシヤリと遮った。見ると、ヴァイオレットがヴァレリアを鋭く睨みつけていた。

「やめなさい！」

ヴァレリアがそつとボブのシャツから手を離れた。そして不満々々の仏頂面で、彼に少しだけ頭を下げた。

「それからあなたも。言つていい事と悪い事がありますよ！」

ボブもまた、仏頂面でヴァレリアに「失礼しました」と小声で呟いた。

相変わらずけたたましいのはロバート一人だった。彼はまた、体を曲げてグラグラと笑い転がっていた。

「やかましい！」

ヴァレリアの鋭い声が飛ぶと、彼は大人しく黙った。

しかし、機嫌を悪くしたわけではないらしく、相変わらず唇に穏やかな微笑を浮かべていた。

「うちの者がすまなかつたね、ヴァレリア」

彼は立ち上がつてヴァレリアの肩に手を掛けた。そしてヴァイオレットの方に歩み寄ると、彼女に深々と頭を下げた。

「それじゃあ、ヴァイオレット。後はよろしく頼むよ。」

俺が言つたことを忘れないで！」

「ええ」

ヴァイオレットの返事を耳にすると、彼は最後にボブの前に立つた。さすがに何かしらの叱責を受けると思つたのか、ボブは少し緊張した面持ちになる。しかし、ロバートはすぐに屈みこむと、ポケットから紙と鉛筆を取り出し小卓の上で何やら書きだした。そしてすぐに立ち上がり、再びボブを見つめた。

「ボブ。後で昌義、ジェフェリー、マッテオの三人をここに呼んでくれ。大事な話がある」

「え……ええ、分かりました」

「それからこれを」

ロバートは困惑するボブに、手の中の紙切れを渡した。日付と時間が、とんでもなく汚い字で書かれていた。

またさらに七日が経つた。日頃のジョッシュ・ワイルダーは格別変わった様子もなかった。くだらない冗談で笑うし、ミミが作った料理を美味そうに何回もおかわりする。いつものように、日曜には着ぐるみを着て、街中をデートして歩く。

しかし、そんな彼の胸中を見抜くのはミミにとつて容易い事だった。ロバート・クロスからの礼金を手にして、夜中に一人座り込む彼を見ていれば分かる。

リーズはあれから時々訪ねてきた。ただ、例の「革命」

のことは一度も口に出さなかった。三人で紅茶を前にしながら、デイズニーのアニメのことや、ルドルフ・ヴァレンティノの『熱砂の舞』のことや、フィッツジェラルドの小説のことや、そんな他愛のないことを話した。しかしミミには、彼女が砂糖壺を取ってくれるよう頼む時でさえ、器用に慎重に言葉を選んでるのが分かった。

出かけると、街の人々の視線が激しく二人に注がれた。以前は親しみだけで接してくれていた人々も、今ではその眼差しに期待と興奮を次第に加えていった。

「どうやら、パンダヒーローはロバート・クロスに反発したらしい」

ミミは行きつけのパン屋の店先で、鳥打帽を被った二人の若い青年が話すのを聞いた。

「そんな話どこで聞いた？」

もう一人が嘔み煙草を歯で捻りつぶしながら聞いた。

「ヴァルナ社に勤めてるイタリア人からさ」

「最近のヴァルナの連中は随分口が軽いな。で、あのパンダヒーローはロバート・クロスと別れるってことか？」

「さあ、まだはつきりとは分からんさ。でもあの男にはもう新しい武器を使いこなす力はないだろうな。だんだん銃や鉄鋼の売れ行きが落ち込んでいっているらしい。おまけに何を血迷ったか欧州との貿易を一気に切っちゃったんだとき。アイツももういい年だし、顔だけで商売するのには限界なんだろうな」

「なんだ、所詮上っ面だけのヤツだったか。でも、そのロバート・クロスがもうダメだとしたら、あの塔には誰が登るんだ？」

「それが、パンダヒーローなのさ」

彼は、口にたまった嘔み煙草の液を、ペッと地面に吐き

捨てた。

「新聞を見たろ？ 新たな革命の先駆者、俺にはその言葉がただの誇張だとは思えないんだ。アイツはロバート・クロスとは違う。俺の兄貴が二十歳の時、フランス

へ向かう船の中でスペイン風邪に喘いでた時、ロバート・クロスは自分の有り金を数えてたんだ。だが、パンダヒーローは違う。アイツは決してそんなことはしない」

「ああ、分かるよ。いいやつだもん」

「そうさ。俺はな、いつかこんな風になじめな奴が損をする世の中が変わるって信じてる。そしてその先頭に立つのがパンダヒーローだって」

ミミは紙袋をぎゅっと胸に抱え寄せ、店から離れた家へ向かって、一人道路を歩いた。

(なんだか、随分と変わってしまった)

あれほど恐れられたロバート・クロスは、自分の権力誇示の為に買ったプロパガンダで、結局自分の首を絞めることとなった。一回の、金次第でなんでも言う事を聞く。パンダヒーローは、逆に英雄になりつつある。そして、かつてジョン・ヘイスティングスを葬った彼を畏怖した人々は、段々彼を希望の光として見ようとしている。

自宅の扉を開けると、居間でジョッシュが静かに読書しているのが目に入った。近づいていくと、彼はすぐに立ち上がって、「お帰り」と笑った。

パンダヒーローは変わった。でもジョッシュはどうなんだろう。

買い物袋を放り出し、彼の胸に抱き着くと、細く柔らかな体の感触が胸に染み通った。この細い腰の線や淡い色の肌は、最初からずっとパンダの下にあったのだろうか。それとも最近になってようやく現れたのだろうか。ジョッシュの腕がミミの体に回された。さらに強く体

が触れ合うと、ミミはあれほど強かったロバートやイーサンへの怒りが次第に萎んでいくのを感じた。そして途端に恐ろしくなった。

変わっていつてしまつたのかもしれない。もし、ジョッシュがネオンライトタウンのトップの道を選んだら、もうこの繊細で淡い体は仕舞われてしまふかもしれない。顔を傾けて彼を見上げると、柔らかな瞳が自分を見つめていた。今まで見たことのない瞳の色。

彼は、トップになつても、自分との恋を守り続けてくれるだろうか。

ミミを抱きしめる腕に、ふりりと震えが走った。「寒い」と一言だけ呟いて、ジョッシュはさらに強く彼女を抱いた。幼児が母親に縋るような手つきだった。

(怖いのはあなたも一緒なのね)

少年は大きな選択の狭間で震えあがっている。その震えが少女に深く染み通った。触れ合う胸と胸にじわりと暖かさが籠った。

「ずっと、あなたというわ」

「ミミはジョッシュに囁いた。

「あなたと私はずっと一緒よ。一緒に食事して、一緒に寝て、大人になったら結婚して子供ができて……。例えばあなたがこのままでも、何になつてもこれだけは変わらないわ……」

ジョッシュが安心したかのように微笑して頬を摺り寄せた。ふわりと柔らかな頬に、ミミもまた安らかに微笑んだ。

しかし、その時、ミミの瞼の裏側に煌めいて映る物があつた。大切な宝物。インク、羽ペン、リボン、キャンディの包み紙。それから、チョコレートの包み紙。

ミミは急いでジョッシュから体を離れた。そして勢い

よく頭を振ると、夕食の準備のために台所へ向かった。

次の日曜日は太陽が高く昇った。しして冷蔵庫のものも尽きた。ミミとジョッシュは眠い目を擦り擦り、ヴィシュヌ街の歩道を並んで歩いた。

どうして食材が一週間もたないのか、というミミのお小言に、若い盛りのジョッシュは首を竦めた。

最初に入ったパン屋は人が多かった。ふたりがガラス戸を開けると、人々は一斉に顔を上げた。ミミとジョッシュが少し緊張した面持ちで一歩ずつ入ると、人々は再び買い物に専念した。しかし二人には、彼らがパン籠の陰や、バゲッドの隙間からちらりちらりとこちらを見ているのに気づいていた。

ジョッシュは自分の張りつめた顔が着ぐるみに覆われているのに、ほっと安堵した。

ふと、ジョッシュは自分の腰のすぐそばに、母親の手を掴んで立っている女の子を見つけた。彼女は、絵本に美しく描かれた騎士がそのまま抜け出てきたのを眺めるような、うつとりとした眼差しをパンダヒーローに向けていた。

女の子の視線を感じると、ジョッシュの頬の筋肉が和らいだ。につこりと捕飛田だが、パンダヒーローは変わらなかつた。しかし、頬が和らぐと同時に、肌がぞくぞくと粟立つのをジョッシュはしっかりと感じた。彼は店中の客の談笑が、屈んだ身を起こした時に持ち上がる人々の視線が、身の内を犯し突き上げていくのを感じた。背筋がキリリと冷えた。

ジョッシュは大急ぎで、レジで財布を開ける。ミミの元へ向かった。

「まあ、嬉しい。新時代の英雄とその恋人がうちの店を鼻負してくれるなんてね」

イサドラ・ダンカンを少し水で薄めたかのような顔立ちの女店主が、小銭を数えながら言った。

「パンダヒーロー。それにミミちゃん。有名人で英雄のあなた方の鼻負店となりやあ、うちも拍が付くつてこんよ。みんなあなた方に期待してるからね。いつかあの塔に登る日が来れば、うちの店をよろしく言つといてちょうだいよ！」

彼女に便乗して、買い物客がどつと捲し立てた。

「そうだぞ、パンダヒーロー！」

「期待してるぞ！」

「我らの英雄！」

「ヴィシュヌの解放者！ ブラフマーの救世主！」

ジョッシュは意味の手を引いて、店の外へ走った。ガラス戸の隙間から、割れんばかりの喝さいが二人を追った。

二人は、人気のないレンガ壁の路地裏に駆け込むと、ようやく立ち止まって荒く息を吐いた。ミミは目を回しながら彼の手を離した。

「大丈夫かい？」

「ええ。でもそつちこそ」

二人は息をついてお互いを見つめ、そして素早く腕を伸ばした。ミミは両腕いっぱい彼の体を抱いたが、パンダヒーローの手触りは固かつた。その内にある細い腰は、どれほど力を入れても感じることは出来なかつた。ぎこちなく抱き合う二人を、壁に張られたポスターの、しあわせうさぎのオズワルドが、さもおかしそうに笑いながら見つめていた。

「あつ、しまった」

突然ジョッシュが間抜けな声をあげた。

「どうしたの？」

「ほら、財布。パン屋に置きっぱなしにしちゃった」

「あ、ほんと！ 私、取って来るわ」

「いや、大丈夫。俺が行くよ」

「でも……」

ジョッシュはミミをひと際強く抱きしめた。

「大丈夫。待っててくれ」

彼は深い声で言うと、体を離し走り去っていった。

あとに残されたミミはほんやりと煉瓦の壁を見つめた。オズワルドの輪郭を指でなぞったり、煉瓦の継ぎ目を数えたりした。そうして静かに心を慰めた。その時だった。

「お嬢様」

若い男性の声と三人分の足音が背後から聞こえた。ミミはオズワルドから指を離すと、顔だけ捻って後ろを見た。

日本人の年若い青年、縮れ毛のイタリア人、背の高いアングロサクソンの男の三人が静かに佇んでいた。

「お嬢様」

日本人が再び口を開いた。

「久しぶりね。マッテオ、ジェフェリー、昌義」

ミミは静かに、冷ややかに再開の言葉を述べた。彼ら三人は皆ミミの知人であつた。あのビルの応接間でニタニタ笑うロバート・クロスの背後のイーサン・カーター。そのさらに後ろに、物も言わずまるでカーテンの裏にできる影のように、薄暗く佇んでいた大勢の一部だつた。「覚えていらつしやいましたか、お嬢様」マッテオが片手を口元に当てて、早口に言った。しか

し、すぐに昌義の咎めるような鋭い視線が彼に飛んだ。
「ええ、忘れるものか」

「ミミは低い声で唸るように言った。

「あそこでの生活一つ秘湯が脳に焼き付いているわ。お前たちが私に笑いかけてもせず、話しかけもしなかったこともね」

昌義が一步を進ませようと身動きした。しかし、ジェフリーが彼を片手で止め、低い声を発した。

「確かにそうですね。ですが昔話をしている時間はありません。私達はあなたに別の要件があるのですから」

「何かしら」

「ミミは踵を擦って片足を引いた。ジェフリーは昌義の耳に、「滅多なことを言うんでないよ」と囁くと、その広い胸を反らし、尊厳さを身に飾り付け徐に言った。

「お嬢様。旦那様直々のお達しです。あなたは前金としての役目を果たせなくなりました。ヴァルナ社のビルに帰ってもらいます」

「ミミは後ずさっていた足を止めた。

「何……何ですって……?」

「ですから、あなたは」

「そういうことじゃない!」

「ミミは叫んで我が身を掻き抱いた。体が震えた。

「帰れ? 帰れですって? クロスさんが? 一体どうして? どこに帰れって?」

「お嬢様……」

「マッテオが眉根を下げて歩み寄った。

「お下がり!」

「ミミが鋭く叫んだ。

「近づくんじゃない! 汚らわしい! まあ、よくもぬけぬけとそんなことを! 帰ってこいですって!! 帰っ

て来たところであの人が何をしてくれるっていうの! 今までだって私のことほったらかしにして捨てたくせに! 私のことなんて見てくれなかったくせに! 逃げたくせに! それなのに今更戻って来いですって!! どうしてそんな勝手なことが言えるの!」

「恨むならパンダヒーローを恨みなさい! 彼が我らの元を離れたおかげで、あなたの前金としての価値が切れたのですから!」

ジェフリーの厳しい声が飛んだ。その激しさに、ミミの小さな体が強張った。幼い恐怖がじわりじわりと体を登る。今すぐ身を屈めて耳を塞ぎたくなる。

しかし、彼女は勢いよく頭を振った。

「いいえ!」

心の中で強く叫んだ。

「いいえ! 負けてはだめ! こんな人達が何よ! こんな人達よりもっと恐ろしいことがあるじゃない! そうよ、ジョツシュと離れ離れになること! 彼と離れることに比べたら、こんな人達なんてちつとも怖くない!」

怯えは勇気へと変わった。ミミの緊張を解き、口汚く勇敢な言葉を喉に迫り上げた。

「そうだ、一体この三人の何が怖いのだ。

「前金! 笑わせてくれるわ! 私はもう金銭なんかじやない! あの頃とは変わったんだ! ええそうよ、誰が帰るもんか! 彼が離れて行ったのはね、ロバート・クロスに人望がなかったからよ! そしてそれは私も同じ! 私は自分の意志であの男の元から去るのよ! 私の帰るところはただ彼の所なんだもの! あの男の所じやない!」

「ミミの怒鳴り声は、壁のポスターすら震わせるほどだった。しかし、三人はミミの言葉に心打たれたようなそぶりや欠片も見せなかった。ただ、何やら訳知り顔でお互いになんうんと頷き合うと、小さなミミを見下ろした。「それなら仕方ない。少し強引な手を使わせていただきます」

ジェフリーの手が強くミミの肩を掴んだ。指先がきつく肌食い込み、体が大きく前に引張られる。

「どうしよう、連れていかれる……!」

「ミミの肌一気に悪寒が走った。ここで抵抗しても女の子一人と大の男三人では、勝ち目がないことくらいミミには容易く推測できた。ところが、腕を引つ張られ、足を引きずられながらも、ミミはそのあるかないかの希望に賭けた。

「私はまた、何かに従わされるだけなの? 人形のように、金品のように」

「いいえ、違う!!」

「ミミは不可う息を吸うと、壁のポスターが剥がれ落ちるほどの声量で思い切り叫んだ。

「ええい、離せ!!」

その声に驚いてジェフリーの手から一瞬力が抜けたのを、ミミは見逃さなかった。彼女は素早くジェフリーの手の先の腕ごと抱え込むと、肘の関節とは逆の方向へ捻り上げた。頭上から苦し気な咆哮が、ミミの頭に降りそそいだ。

「おい! 何やってる、大人しくしろ!」

「マッテオがジェフリーの代わりに駆け寄った。手を出したおかげで無防備になった下腹に、ミミは鋭い蹴りを入れた。呻き声を上げてマッテオが倒れると同時に伸びた昌義の手を、ミミは体制を低くして避けた。そのまま地面の上で一回転し、大通りに向かって駆け出し

た。

日曜の買い物客で賑わうブラフマー街の大通りを、ミミは夢中で駆けた。人どぶつかり、車のすれすれを走り、路面電車が衝突しそうになった。

「ジョッシュ！ ジョッシュ！ どのなの、助けて！」

ミミは声の限りに叫んだ。喉が焼け付くほど叫び、必死に彼の姿を探したが、彼女にぶかし気な視線だけを送る人々だけが目の前を流れていく。

喉も足も疲れ切ったその時、背後から忙しない三人分の足音が近づいて来た。

(どうしよう！ もう回復したのね！)

ミミは気管が潰れそうなのも構わず、さらに足を駆つた。ところが、焦るあまり彼女は歩道に隆起した突起物に気づかなかつた。足を引っかけ、ミミは地面に大きく転倒した。柔らかい膝がアスファルトで擦れ、激痛が走つた。三人の男の体重が倒れ込んだミミを押しさえた。腕も足も掴まれ、地面に強く縫い留められる。もう反撃の余地はない。

しかし、それでもミミは諦めなかつた。

「誰か助けて！」

彼女は焼け付く喉の許す限りに叫んだ。

「お願い助けて！ 誰か！ 助けて！」

小さな少女が大人三人に押しさえつけられ、必死に叫ぶ様子にさすがの人々も足を止めた。ところが、三人の男の腕に光っている矢印の腕章を目にすると、一人残らず踏み出しかけていた足を元に戻した。ただ困惑と怯えの騒めきだけが路上を埋め尽くす中、ミミの叫びが高く響いた。

ボブは糸巻きやらパッチワーク用の鮮やかな布が入った紙袋を胸に抱き直すと。ため息をついて背後を見た。

「いい加減にしないさい、トレイシー」

兄に窘められても、トレイシーは店先のショーウィンドウに飾られたきらびやかなドレスにへばりついて離れなかつた。普段から妹の「買って買って」攻撃は頑固なものだったが、今日はとりわけ筋金入りの頑固さだ、とボブは頭を抱えた。

「なあ、トレ。あんまり兄さんを困らせないでくれよ。」

そもそもそのドレスは大人用なんだから、子供のお前じや着れないじゃないか」

「そんなことはないもん！」

トレイシーがふつくらとした唇を尖らせて兄を見上げた。くりくりとした茶色い目が、可愛らしい怒りに燃える。

「あたしもう十一歳だもん！ 子供じゃないわ！ 立派なレディよ！ だからもっと大人な恰好をしなくちゃいけないの！」

「はあ、随分とムキになるじゃないか。なんだってお前

最近ドレスなんか拘るのさ。お前は何着たって十分可愛いのに」

「可愛いだけじゃだめだもん！」

すべらかな頬がぷっくり膨れるのを見て、ボブは笑いを零した。しかし、トレイシーは兄とは対照的に、そのくりくりとした瞳に慣れない憂いを浮かべた。

「だってあの人、あたしをお転婆さんなんて呼ぶのよ。」

そんなのあたし嫌だもん。あたしはお転婆さんじゃなく、女の人になりたいの。お転婆さんじゃ、あの人あたしを好きになつてくれない……」

ボブはやれやれと肩を下ろした。妹が騒ぎだてるのは大抵、今は顧客の採寸に出かけているイーサンに関してのことだ。トレイシーのわがままには参るが、とは言え確かにあらゆる女性をその美しさで惹きつけてきたイーサンにとつて、トレイシーはお転婆さんでしかないのも事実だ。そう思うと、なかなか彼女をきつく叱ることがボブにはできなかった。

「なあ、トレイシー」

彼は妹に優しく声をかけた。

「気持ち分かるけど、さすがにそのドレスはサイズが大き過ぎる。だから今日のところは諦めて、ちゃんとお前の背が伸びたところを買えばいいじゃないか。心配しなくても、それが似合う頃になるまで、イーサンは待つてくれるさ」

「ほんと？」

「もちろん。あいつのことは俺が一番よく知ってるからな」

トレイシーはぱつと華やかに笑つて、兄の腰に抱き着いた。ボブも妹を愛情たつぷりに抱きしめ、手を繋いで歩き出した。

「兄さんは、あたしがイーサンを好きだつて気持ち分かつてくれる？」

トレイシーは不安そうな目を兄に向けた。いくらお気楽なわがまま娘でも、十歳以上年上の男に恋をするのは不安なのだろうか。ボブはそう思い、一際強く彼女の手を握った。

「ああ、大丈夫。よくわかるさ」

トレイシーが安心したかのように、繋いだ兄の手を振つた。しかし、その振り方にはいささか元気がなかつた。

「でもね、兄さん」

幼く高い声が急激に大人びて低くなった。驚いて傍らを見ると、妹はその愛らしく丸い額を切なさに歪めていた。

「あたしね、最近思うの。いくらあたしが美人になっても、目いっぱいお洒落しても、イーサンはあたしに振り向いてくれないんじゃないかって……何となく」

「どうして？」

ボブは足を止めて彼女を見た。妹は表情こそ悲し気だが、どこかけろりとした様子で言った。

「イーサンはね、他に誰か好きな人がいるのよ」

「え……？」

「あら、何故驚くの？」

トレイシーは茶色い目を矢の切つ先のようにすぼめて口を開いた。

「だから兄さんはあたしの気持ちが分かるでしょ？」

ボブはしばらく言葉返せなかった。温度の高いほとばしりが胸に湧き上がった。失恋の予感に眉をひそめる妹を気の毒に思うことすらなく、彼はその胸の熱さに夢中になった。

「まあ、それでも諦めないけどね！」

トレイシーが打って変わって明るく無邪気に言った。

彼女の声に、ボブははっと目をしばたかせた。

「イーサンに好きな人がいるとしても、あたしもっと頑張ってみるわ！もしかしたら彼の気が変わるかもしれないもの！」

トレイシーは笑い声を靡かせながら、スキップして通りを抜けて行った。いつも通りの明るいお転婆娘に戻った妹にボブはどこかほっとして、彼女の跡を追った。

その時だった。

「誰か助けて！」

女の子の悲鳴が高く響き渡った。

「大通りからだわ、兄さん！」

一際耳のいいトレイシーが緊張した声を出した。ボブはさっと頷くと妹の手をしっかりと握った。そして、その肥満体からは想像もできない速さで地面を駆けた。

大通りには大勢の人が集まってさざめいていた。ボブはわずかの息の乱れもなく人々の柵を掻き分け、ようやく道路に出た。

「お願い助けて！誰か！助けて！」

高い声とともに、赤毛の少女が三人の男に取り押さえられているのが、目に飛び込んだ。

（そんな！ミミじゃないか！）

ボブは絶句した。しかし、すぐに頭を振って理性を取り戻すと、安全装置が付いたままの銃を取りだし三人に向けようとした。

（あれ？）

太い指が引き金にかかっていた。しかし、その指に力を加えることなく、ボブは三人の顔を呆然と見つめた。

（一体どうして？）

いたいけな少女を押さえつけている無慈悲な三人組。

そのいずれも気さくで優しいボブの同僚だった。

困惑したボブは、地面に棒立ちになり、騒めくだけの群衆の声に飲み込まれていった。

さんざん揶揄われながらパン屋から財布を取り戻すと、

ジョッシュは後ろ暗い気持ちで通りを歩いた。いつもにもまして財布がずっしりと重い気がする。その質量が、あの夜自分に擦り寄ったロバート・クロスの頭の重さと重なり、ジョッシュは年に似合わぬ辛い笑みを片頬に浮か

べた。

（結局俺はロバート・クロスの金がなきゃ、パン一つ買えないのか……）

そう思うと、一層早くミミの顔が見たくなって、彼は元来た道を足早に歩いた。

そして、やけに人が騒ぎ立てているのに気が付いた。

（なんだろう？）

素朴な疑問が、ふと嫌な予感に変わった。街を行く人々の会話の端々に、女の子が、例の男の部下が、といった言葉が立ち昇っている。

（まさか……！）

ジョッシュは確信した。今すぐにでも向かわなくては。

しかし、彼は最初に、工場の壁に立てかけられた角材を手を取った。そして、踵を返すと大通りの方へ向かって素早く駆け出した。

大通りに着くと、流れていく人の波がそこでせき止められていた。人々の柵の間から、ミミが取り押さえられているのが切れ切れに見える。彼女に被さる男達の腕に、まだ自分の金属バットに張り付いたままのステッカーと同じ紋章が、太陽の光にきらりと光った。ジョッシュはしばらく呆然と彼らの姿を見つめていたが、やがてこの場所がジョン・ヘイスティングスを殺害した場所、ミミを取り押さえられている彼らが、ヘイスティングス殺害計画の協力者だった人達だと分かった。

（ロバート・クロス！）

ジョッシュは着ぐるみの中で震え始めた。涙が次々と溢れ、頬を滑っていった。

（あなたはどこまで人を傷つければ気が済むのですか……。カーターさんを暴力で支配するだけじゃなく、ミミにまで同じことをするのですか……。俺からミミを奪っ

てまで、俺に言う事を聞かせたいのですか……!」

「お願い助けて! 誰か! 助けて!」

ミミの叫び声が虚しく響いている。誰も動こうとはしない。

ジョッシュの柔らかい掌に、爪が鋭く食い込んだ。その傷口から痛みと共にじくじくと怒りが立ち昇っていた。

俺は一体何を迷っていたんだ。

ミミの叫び声と共に、そんな声が耳の奥に響いた。

今、あの男が傷つけているのはミミだ。俺を呼んで必死に恐怖と戦っているのはミミなんだ。ミミ。俺の愛しい人。何を犠牲にしても守りたい相手。そのミミを、あの男は支配しようとしているんだ。そうさ、ジョッシュ! 一体何が怖い?! 何をためらっている!! 今俺が一番恐ろしいのはミミと引き離されることだ!! そうさせないためなら、俺はなんだってできるじゃないか! さうさ、行け! パンダヒーロー!

彼のすぐ隣に立って親指を口に咥えていた小さな男の子が、不思議そうに彼を見上げてポツリと言った。

「あつ、パンダヒーローだ」

すっかりとその言葉を聞いただろうか。男の子が言い終わらないうちに、彼は広場に躍り出た。白と黒の大きな体が鮮やかに現れると、人々は一斉に騒ぐのをやめた。ミミも、潤んだ瞳に彼の姿を映し、口を閉じた。ただ、二人だけはまだ下を向いて何やら叫んでいた。パンダヒーローは足音高く跳躍した。そして、一番高く突き出ていた一人の頭部に角材を振り下ろした。呻き声と鮮血がほとばしった。

「マサ!」

美しい巻毛のイタリア人が悲痛な声を上げてミミから

離れると、仰け反って倒れた日本人の青年に駆け寄った。

「マサ! しつかりしろ、マサヨシ!」

と、彼は血を吐くような声で叫んだ。昌義は彼に答えずに、苦しそうに呻き続けた。イタリア人はもっと高い声で名前を呼び、彼の額から流れる血を止めようとした。

「ミミを離せ」

パンダヒーローは三人の男の頭の上から、冷たく静かに言った。

「マッテオ! 持ち場を離れるんじゃない! 早くこの娘を押さえろ!」

白人の男が鋭く叫んだ。

「聞こえなかったか?! ミミを離せと言ったんだ!!」

パンダヒーローが窓ガラスも震わせんばかりの声で怒鳴った。ところが、白い肌の男は少しも怯んだ様子も見せず、小馬鹿にした笑みをうつつすらと浮かべて言っていた。

「悪いが断る。これはロバート・クロス様の命だ。お前があの方の元を離れ、呼び出しにも応じなくなったら、お嬢様の前金としての価値が切れた。もうお前を繋ぎとめるものとして役に立たなくなったら、引き取りに来た。それだけだ」

「引き取ってどうするつもりだ」

「さあね。あらかたまたま新しい殺し屋でも雇ってそいつに渡すんじゃないか? 次の相手がお前のように年若い紳士とは限らんがな!」

パンダヒーローが激昂して角材を振り上げて躍りかかった。ところが、地面から起き上がったイタリア人、マッテオがその先を交差した両腕で受け止めた。骨と角材

がかち合う鋭い音が響き、マッテオが痛みで悲鳴を上げた。しかし、さすがにヴァルナ社の警護団に属している

だけ、彼は見事だった。痛みで顔が歪んだのも束の間、彼の片足が素早く振り上げられ、パンダヒーローの腹を蹴倒した。

群衆が再びどよめきた。しかし地面に倒れ込みながらもパンダヒーローは再び角材を振った。地面に背が触れる直前、固い角材がマッテオの脛に強く打ちつけられた。そして彼の体が崩れる前に、パンダヒーローは起き上がり、更にその右頬にもう一発お見舞いした。

先に倒れていた昌義の上に重なるように伏したマッテオの頭上に、パンダヒーローが大きく角材を振り上げた。その時だった。

「動くな! こつちをよく見ろ!」

パンダヒーローは手を止めて声の主を見た。それと同時にミミの高い悲鳴が響いた。

「これ以上抵抗してみろ! 娘はただじゃすまんぞ!」

白人の男に羽交い絞めにされ、こめかみに銃口を付けられたミミが口から恐怖を高く突き上げられている。ジョッシュは、後頭部を氷の管で貫かれるような感覚を覚えた。

(ミミ……!!)

「さあ、観念しろ。これまで通り、あの方の手となり足となると誓うんだ。この娘をダシに取られちゃ、お前も何もできんだろう」

彼がせせら笑ってミミの首に回した腕に力を入れた。

ミミが苦しそうな声を出し、銃口がさらに頭部にめり込む。

「やめろ! やめてくれ!」

ジョッシュは必死の叫びをあげ、角材を持った手を緩めようとした。

ところが少女の鋭い声で阻まれた。

ボブは割れんばかりの歓声の中、片手でしっかりと妹を抱え寄せた。トレイシーは小さな手で力強く兄のジャケットを握った。ボブもまた、大粒の汗を黒い額から流れ落とした。

(一体何がどうなってるんだ……)

ボブの深く聡い瞳はじっと、ミミを抱き上げ着ぐるみの毛を風に靡かせて立つパンダヒーローに注がれた。

(そんな……)

人々の声は収まるところを知らない。高く激しく狂乱するばかりである。

「そうだ!! そいつらに留めを刺しちまえ!」

誰かが叫んだ。その声は隣へ、またその隣へと流れだし、やがて人々の目は地面に横たわる三人への憎悪へと変わった。

(ああ、まずい……!)

ボブは素早くトレイシーに「すまないが手伝ってくれ」と囁くと、人々の声が行動に変わる前に、目にも止まらぬ速さで通りに駆け出した。

二人の黒人の兄妹がパンダヒーローの前に現れると。

一塊になっていた声が少しずつ乱れ始めた。

ボブは地面から昌義とジェフェリーの体を起こし、両の肩に担いだ。トレイシーは比較的軽傷のマットオの体を支えて立ち上がらせた。声援が二人の動きに合わせて、徐々に萎まっていく。

「ボブ……? ボブじゃないか!」

パンダヒーローが着ぐるみの中からくぐもった声を出した。その声の、まるで鈴を転がすかのような可憐な細さに、ボブは思わずぞくりとした。

「久しぶりだな、パンダヒーロー」
彼は穏やかに返した。

「ああ。でも、どうして君がここに……、あつ、待つてどこに行くつもりなの?」

ボブとトレイシーが歩き出そうとするのを見て、パンダヒーローが慌てて言った。

「この人達を安全な所に連れて行く。ケガをしているからな」

「ダメだ!!」

彼が高い声で叫んだ。肩で息をしていた。

「何がダメなんだ?」

静かにボブは返した。パンダヒーローは何も答えなかった。

「そんなの、そいつらがクロスの一派だからだろ!」

一人が変わって叫んだ。また一人が叫んだ。そして、また一人。

「そうだ! そいつらを渡せ!」

「クロスから汚ねえ金もらってんだろ! じゃあアイツと同罪じゃねえか!」

「理由はそれで十分でしょ!」

また再び声が膨れ上がった。その中でボブとパンダヒーローは静かに、ただ何も言わずじっと見つめ合った。

その時、パンダヒーローの腕が緩み、ミミの体がずりどずり落ちた。

「しっかり支えろ!」

ボブが厳しい声を出した。それに弾かれたかのように、彼は膝を曲げてミミの体を強く抱き直した。

ボブとトレイシーは通りを離れて歩き始めた。人々はまだ、兄妹と共に去って行く三人をなじる声を上げていた。

しかし、何故か一人としてボブとトレイシーの行く手を阻む者はいなかった。地面には昌義の額から流れた血が点々と付いたが、その跡を追う者もまた一人としていなかった。

彼らはただパンダヒーローに向かって叫び続けていた。ぐったりとした少女を抱くヒーローに向かって。

声が届くこともなくなった、人気のない路地裏にたどり着くと、ボブはようやくほっと息を付いた。肩からジェフェリーと昌義を下ろすと、二人のジャケットを脱がせて丸め、頭の下に差し入れて地面に寝かせた。

大の男二人を担いで歩いたおかげで、巨漢のボブでもさすがにくたびれてしまった。ところが、マットオを支えて歩き続けた小さなトレイシーは彼以上に疲れ切り、すっかり目を回してしまっていた。

「トレイシー。お前は少し休んでな」

そうボブは言ったが、トレイシーはそれには答えず、腕に下げている買物かごから魚屋で貰った氷を取り出して、マットオの腫れあがった頬に当てた。

「兄さん。あたしはいいから早くこの人達のケガ、見てあげて」

ボブは妹の言葉通りに手当に掛かりながら、後で彼女に缶入りチョコレートでも買ってやろうと強く心に決めた。

ジェフェリーはすぐに目を覚ました。眼球の前で指を動かしてみたが、目の動きには特に異常はなく、記憶障害もない。昌義も額を切っただけで脳に問題はない。出血は血管を圧迫するとすぐに止まった。

「すまない、助かったよ、ヴィンスレット」

と、マッテオが安心してきつた顔で言った。そして自分の頬を冷やしてくれているトレイシーに、「あなたもね、優しいお嬢さん」とキザっぽく言って彼女の頬にキスをした。トレイシーがたちまち顔を赤くしたのは、もちろんマッテオが巻毛だからである。

「ちよっと、うちの妹に変なことせんでくださいよ！」

ボブが昌義の額にハンカチを当てながら、マッテオをギリりと睨んだ。マッテオがわざとらしく首を竦める。

このプレイボーイのイタリア人に相変わらずむっつりとした顔をしたまま、やがてボブはゆっくりと口を開いた。

「で、そろそろ教えてくれませんか？」

「何を？」

「さっきのアレです」

ボブの手が、昌義の額から離れた。

「アレは一体何だったんです？ どうしてお嬢様にあんなひどいことを？」

「そのことか」

昌義が答えた。声がほんの少し震えていた。見ると、その桃の実のように幼い顔が、困惑で揺れていた。

「実は僕達にもよくわからないんだ」

「はあ？」

「旦那様がおっしゃったことでね」

昌義の言葉を、地面に寝ころんだままジェフェリーが引き継いだ。

「ヴェインスレット。いつかお前、俺達を呼び出した時があったら？ あの後、俺達は書斎に集められて旦那様にこう命じられたんだ。『ミミを連れ戻すように仕組んでくれ。きつとあの子は嫌がるだろうから、多少乱暴な手を使って構わない。そうすればきつとパンダヒーローが怒ってやって来るだろう。そしたらなるべく人通りの多

い場所でやりあってくれ。そして必ず負ける。絶対に彼が勝つようにするんだ』って」

ボブは首を捻った。

「負ける？ 自分の不利になることをわざわざ大勢の前でやれって？」

「ああ、そうだ」

「それで、あなた方はそんなバカげた命令をあつさり受諾したんですか？ 命令だからって、あんな乱暴を女の子にして……」

「いや、そんなまさか!!」

マッテオが鋭く叫んだ。

「俺達二人ともみんな断ったさ！ 女の子に……お嬢様にそんなことするなんてとても考えられなくて……！」

でも旦那様は折れなかった。あの人、最後まで粘って粘って、結局俺達が先に折れたんだ」

「……なんだかよく分からないなあ」

ボブは唸って頭を抱えた。トレイシーも、兄を見つめて、そのクリクリとした黒い目をひそめた。

「この頃の旦那様、少しおかしいと思わないか？」

ジェフェリーがようやく体を起こして言った。

「俺は若旦那様の次に長くあの人をそばに居たから、あの人のことはよく知ってるんだ。あの人突拍子もないことするのは昔にもよくあったが、それでも最近は常軌を逸している。なぜ今更パンダヒーローなんか雇ったんだ？ プロパガンダなんかする必要があったか？ どうしてジョン・ヘイスティングスを殺した？ 酒の利権が欲しいなら、殺す以外にもっと方法があったはずなのに。それに何故若旦那様を追い出した？ あんな素性も分からないパンダヒーローより、長年一緒に暮らしてきた若旦那様の方が遥かに信頼できるのに」

ボブは二重顎を撫でて下を向いた。そうすると二重の顎の肉がさらに三重になりかなり滑稽なのだが、それでも黒い瞳は聴く深い色に染まる。

「あのジョン・ヘイスティングスの殺害。いくら権力を見せ付けたとは言っても、それと同様に批判も必ず出るはず。だったら誰も知られないところで殺すか、お得意の色仕掛けでも使った方が遥かに安全。確かに、旦那様のやり方は少し変ですね」

ボブは言い切ってから、暫く顎に手を当てて考え込んだ。

（あのロバート・クロスが……何が起きてても余裕積的なあのロバート・クロスがこんな簡単なことに気づかないなんてことあるか？）

その時ふと、傍らのトレイシーが心配そうに自分を見つめていることに気づいた。ボブは大急ぎで笑顔を作ると、勢いよく頭を振った。

「まあ、それはとりあえず置いて。とにかく、今は一度ビルに戻ってちゃんとした手当を受けた方がいいでしょう。頭は特に放っておくとまずいですから」

昌義がゆっくりと頷いた。

「ああ、確かに、ヴェインスレット」

「まあ、心配しなくてもすぐにほとんどよくなるでしょうけど。明日、改めてトレイシーとお見舞いに行きませよ」

「明日か……」

突然、昌義が寂しそうな顔で俯くのを、ボブは見つけた。

「何かあるのですか？」

「いや、実は俺達二人とも明日には会社をやめて、この街を出ることになって……」

「いや、実は俺達二人とも明日には会社をやめて、この街を出ることになって……」

「え、ええ!! そうなんですか!!」
マッテオが昌義の代わりに答えた。

「これも旦那様のお達しなんだけど、さつきマサが言ったように、早いうちにニューヨークに移動することになつてるんだ。そこで一先旦那様の知り合いの会社で働かせてもらうことになつてる。東部ならワズプ以外の移民も多いから、俺達が差別されることも少ないだろうって、汽車の切符も取ってくれたし、新しい住居も見つけてくれたんだよ。俺達の家族ももうそこに送られてる。後は俺達が向かうだけさ」

「は……はあ」
ボブはやたらと頭をガシガシと掻き、ぐるぐるとそこら歩き回った。

「まあ、次の仕事が見つかるならいいんですけど。でも何だか……随分旦那様は世話焼きなんですね」

「そりゃね」
マッテオが頬を緩ませた。懐かしさに、その青い瞳が安らいでいた。

「あの人はいつも俺達に優しくしてくれたもの」
「旦那様がですか?」

ボブは黒い目を驚きで瞬かせた。書斎で毎日小馬鹿にしたような笑みを浮かべて来客を持って成すロバートの姿と、部下のために汽車の予約の電話をせつせとかけるロバートの姿が、くつついたり離れたりした。

「まあ、優しいと言えはそうなんだけど、旦那様はどっちかって言つと……」

「甘えてる」
言いすらそんなマッテオの言葉を、ジェフェリーがきつぱりと引き継いだ。普段は平行に引き締まっている口元が、ムっと曲げられている。

「旦那様……いや、あのガキはどうしようもないヤツだよ。いつもオドオドビクビクして、何も一人では決められなくて、人に敵しくできなくて、迷つてばかりいて」
「その上、うっかり屋でおつちよこちよいで」

「寂しがり屋で、泣き虫で、子供っぽくて……」

ボブは、二人の先輩が突然上司の悪口を言い合うのを、あつげらんとして見つめた。今までロバート・クロスについての評価など、顔や体の美しさか、その悪名についてのものしか知らなかった。こんな風に、まるで出来損ないの小学生のような悪口など聞いたことがなかった。

「い、一体どんな人なんですか、ロバート・クロスというのは……」

目を白黒させながらひねり出したボブの問いに、三人はそつと目を伏せた。睫毛の隙間から、深いため息が滲み出ていた。

「俺達はお前よりもずっと長くあの人のそばにいた」

昌義がささやきに近い声で話し始めた。

「お前よりもあの人の色んな顔を俺達は知っている。だけど、それだけであの人がどんな人か分かるわけじゃない。現に、今日の命令だつて分からないことだらけだった。あの人の思いや生き方を決めるのはあの人でしかないんだから」

ボブは何も答えなかった。耳をそばだててみたが、パンドヒーローを取り囲む声援は、もうここには届いてこなかった。

「今日のことは、あの人ひとりで決めたことだ。いつも迷つてばかりのあの人一人で。だから俺達にはすべては分からない」

ジェフェリーが痛みが残る額を押さえて下を向いた。静かな瞳に、苦し気な色が混じった。

「だがな、ヴィンスレット。ただ一つ、俺達にも分かることがある。これから、俺達は最低の卑怯者になるってことだ。臆病風に吹かれて逃げだした、そんな卑怯者にな。だがな、ヴィンスレット。それでも俺達はこの道を行くよ。旦那様がくれたただ一つの逃げ道だ。だつて、俺達にだつて、旦那様と同じように大事な家族があるんだから」

突然、ジェフェリーがウツと悲鳴を上げて、額を押さえた。トレイシーが心配そうに彼に駆け寄った。

「痛いの、おじさん!!」

「あ、ああ、少しね。でももう大丈夫だよ、お嬢さん」
「早くビルに戻って休んでください」

ボブが素早く彼らに踵を返した。

「一旦家に戻つて車を持ってきます。トレイシー、ちょっとここでこの人達を見てあげてくれ。十分で戻るからね」

ベージュのジャケットの裾を翻してボブが駆け出した。しかし、彼の体が曲がり角のレンガ壁に隠れる寸前、突然ジェフェリーが叫んだ。

「待ってくれ、ヴィンスレット!!」

「は、どうかしましたか?」

レンガ壁からひよつこりとボブの顔が現れたのを見て、ジェフェリーがそつと微笑んだ。

「もし、これから先若旦那様とお嬢様に会ったら、伝えておいて欲しいことがあるんだ」

「え、ええ。なんででしょう?」

ジェフェリーの瞳の端に涙がうつすらと浮いていた。昌義の茶色い瞳も、マッテオの青い瞳も、しつとりと湿つていた。

「ただ一言。どうか幸せになってください、と」

その日曜の夜が訪れ、人々の呼吸が整えられる間もなくあつげなく過ぎた。例の三人は無事にグラントセントラル駅行き汽車に乗った。太った黒人の男が、妹と彼の同居人を相手に窓枠に肘をつけて、遠くの空を眺めた。高い塔の上で、見目麗しい金髪の男がグラスを傾けていた。

新聞が刷られた。朝早い時間から、人々は郵便受けや売店やカフェに群がった。一人の利発そうな美女がそれを取り、はつと赤い唇に指をやった。

朝が来ると、パンダの着ぐるみが一人の赤毛の少女を伴ってヴィシヌ街を抜けて行くのを、大勢の人間が見ていた。

ミミは彼の広い白黒の背中を眩しく眺めて歩きながら、昨夜のことを思い出していた。

素晴らしい夜だった。星々が瞬く光の下で、ジョッシュはロバート・クロスからの礼金を全て燃やした。彼の滑らかな白い頬が赤く照り映えるのを、ミミは玄関ボーチに座って眺めていた。体には乱暴された時の痛みと、彼に抱かれた時の感触が残っていた。

やがてジョッシュが振り向いた。彼の顔は美しく整えられていた。深く色濃く艶めかしかつた。

腰を細い腕で引き寄せられたと思ったら、次の瞬間には温かな唇が自分の唇に被さっていた。ミミは一瞬驚いて身を固めたが、すぐにジョッシュの唇に身を任せた。

「ジョッシュ。本当に私でいいの？」

唇が離れると、ミミは不安そうな目で言った。

「私、ちつとも美人じゃないし、地味だし、田舎臭いし……。でもあなたは私を選んでくれるの？ あんなに綺

麗なクロスさんより、私のことを愛してくれる？」

ジョッシュは何も答えなかった。しかし、その瞳にはすでに覚悟が浮き出していた。やがて彼は、二度目の接吻で答えを返した。

ミミにとって、初めてのキスだった。触れ合う唇は暖かく、互いの胸は、中の心臓の音まで一緒になるようにぴったりと触れ合っていた。開かれたままの瞳には、互いの恋を映し合い、星の光が二人を彩っていた。

しかし、ミミはこれが初めてには思えなかった。遠い昔、どこかでこれに似た接吻を見た気がしていた。

ミミはすぐに頭を振ると、ジョッシュの胸に頬を付けた。

昔の事なんてどうだったいいい。

そう静かに、声には出さず呟いた。

もう私は彼の恋人だもの。銃を突き付けられ恐怖で狂いながらも、今までの葛藤も迷いも一気に捨て彼に叫んだ時から、もう決めていた。私はこの人が好き。どんな人よりも一番。何を切り捨てても。

ミミが昨夜のことを返し返し思ううちに、二人はやがてある一軒家にたどり着いた。ミミは一時、心の中の物を忘れた。その家は少しも華やかな様子はなかったが、こじんまりとした心地よさげな住まいだった。木製の温かみのある屋根、小さなテーブルと椅子が置かれたボーチ、庭には冬の花々がひっそりと咲き、香りのいい小さな畑のあるその家は、まるで訪れる者全てを優しく抱擁するかのようだった。

「まあ、かわいい！ まるで妖精の隠れ家みたいね、リーズ先生のお家って！」

ミミが子供っぽく笑って言った。昨夜、接吻を経験したとは思えないほどあどけない彼女の顔に微笑しながら、

ジョッシュは手にした紙切れをじつと見つめて住所が間違っていないか確認した。それはいつかりーズが彼らを訪ね、帰った時に、ティーポットの下にさり気なく挟み込まれていたものだった。

ジョッシュは手を伸ばしてミミの手を取った。彼女の体を引いて、そつと扉を開けた。

家の中は、そのこじんまりとした外形に似合わず、たくさんの人でぎつちりと詰まっていた。その大勢は、女性も男性もみな清潔で簡素な服を着て、居間の大きな円卓を囲んで、何やら興奮気味に話し込んでいた。一人が声を荒げれば、たちまち抱擁の腕が伸ばされる。彼らの熱気に、二人の存在は見事掻き消された。

ところが、そのうちの一人が円卓からゆらりと立ち上がった。その美しく清潔な姿は、紛れもなくリーズ・ドーキンスだった。

「ああ、ミスター・パンダヒーロー。きつといらつしやると思っていましたわ」

彼女の声に、円卓の人々が一齐に玄関の方を向いた。

「おお！ これはパンダヒーロー！」

と、初老の資本家らしい男性が叫んだ。それに続くかのように、口々に人々が捲し立てた。

「本当だ！ パンダヒーローだ！」

「まさかこんなに早く会えるなんて！」

「待っていましたぞ、君を！ さあさ、こちらへ来て掛け給え！ ミス・ドーキンス、英雄を立てさせたままではいけませんよ！」

リーズは素早く歩み寄り、二人の手を取った。彼女の顔が、ファンデーシジョンの下で赤く火照っていた。

「さあ、どなたがこの方達に席を！ お話したいことが山ほどあるの！」

あれよあれよといううちに、ジョッシュとミミは一等いい椅子に座らされ、頬の赤い人々に取り囲まれた。

「あ、あのう、ミス・ドーキンスこの人達は？」

ジョッシュが着ぐるみの中で目を白黒させながら人々を見渡した。

「あら、いけない！ 紹介が遅れたわね！ この方たちは所謂反クロスの方々だね。この街の革新を夢見て長い事議論を重ねてきたの。仕事の合間にヒマを見つけてはこうして集まってね」

リーズが息を弾ませながら言い切ると、二人の肩に手をかけ、声高らかに言った。

「さあ、みなさん！ 改めてご紹介しますわー この方は我がパンダヒーロー！ そしてこの子はミミ！ 彼の大事な人よ」

その言葉で、ようやく昨夜の接吻が輪郭を持った現実として口の端に立ち昇り、ミミはたまらなくなつて赤い顔を手で覆った。その様子に、人々は心地よく笑った。

ジョッシュは静かにミミの肩に手を置いた。そして片方の手で机に置かれた朝刊を取った。

「今日出たばかりの物よ。あの群衆の中に新聞記者がいたようね」

リーズが言った。生地にはぐつたりとした少女を腕に抱き、空を見上げる。パンダヒーローの写真と、『新たな英雄。パンダヒーロー、ロバート・クロスに宣戦布告！』という大見出しがあった。ジョッシュはその先を読みだした。

『一九二八年、二月二十日、午前の出来事であった。ネオンライトタウン中部のヴィシュヌの大通りで少女の悲鳴が上がった。十三、四の少女が三人の男に追いかけて回され、とうとう押さえつけられた。三人の腕にはヴァル

ナ社のロゴが腕に有り、あの非道なロバート・クロスの仕業であることは明白であった。いたいな少女が必死に助けを求める中、一人彼らに怒りも露わに近寄る者がいた。クロスとならぶ圧巻とされるジョン・ヘイスティングス殺害に携わったパンダヒーローであった。彼は華麗に三人を打倒し、その小さな恋人を腕に取り戻した。そして彼はなんと、自分の雇い主であるクロスを声高らかに批判し、彼に反旗を翻すことを宣言したのだ。現在、ロバート・クロスの悪行はヘイスティングス殺害を始め続々と表に現れている。それを遂行していたパンダヒーローもとうとう彼の行いに愛想をつかし、民衆の味方となったのだ。大勢が待ち望んだヒーローが誕生した瞬間であった。』

「その記事を読んでどんなに心が躍ったことか」

背後からリーズの鈴のような声があった。見ると彼女の手が肩に掛けられている。

「やっとヒーローができあがった。そう思つて、それを買った売店の前で大声で叫び出した気分でしたのよ。あなたはとうとう決断されたのね」

「ええ、そうです」

パンダヒーローが凜とした声で言った。ミミを抱く手に力がこもった。

「ミス・ドーキンスからお話を伺つてから、私はずっと迷いどおでした。以前からクロスとの確執は自覚していましたが、いざ行動に移すととなると、己の内に巣くっていた怯えが私の行く手を阻んでいたのです。私は臆病で意気地がなく、彼を心の底から憎む勇気がなかった。

それでももう今は変わりました。私の恋人がああ男の命令で傷つけられるのを目の当たりにして、私ははつきり彼への憎悪を自覚しました。そして恋人の必死のこぶが

私を勇敢にしたのです！ みなさん！ 私はパンダヒーローです！ 自らの心に決めました！ 私は私のため、恋人のため、そしてみなさんのためにエロイカになると！」

群衆に歓声が上がった。そのかわいいパンダの面の下からキリリと聞こえる、若く瑞々しい声が彼らを身の内から熱く激しく刺激した。ジョッシュもまた、普段影の暗殺者として出すことのなかった声の、その大きさを響きに歓喜していた。ミミはただ、ひたすらに彼の顔を見つめていた。彼の昨夜の動き一つ一つが、自分の体に立ち昇った。

「ああ、なんと嬉しいこと！ とうとうロレンスの無念が晴らされる！ あの町がもう一度戻つて来るんだわ！」

リーズが長い睫毛の先を指先で押さえて言った。人々もまた、何か深い情を心に湧かせ、唇を横に引きながらも苦し気に俯いた。

「私も何度、屈辱的な思いであの塔を見上げたことか……」

「働いても働いても楽にならなくて……」

「なのにああ男の一派は金ばかり貯め込んで……」

「そうよ！ それも人なら絶対に手を出さないような汚い仕事の賃金をね！」

「その通りさ！ 俺の親父は戦争でひどい精神ショックを患つたんだ！ なのにアイツはそういう人々を見ようともせず知らん顔だ！」

「ええ！ そうです！」

一際高く鋭い声が、人々の中から付きあがった。その声の主は人々の間から静かに進み出て、パンダヒーローの前に立った。まだ十五、六歳の、ジョッシュと同じ年の頃の少年だった。

「初めまして、パンダヒーロー。僕はヘンリー・シャロ
ープと言います」

差し出された右手を、パンダヒーローは取った。ヘン
リーは淡い色の瞳を劇的な熱でたぎらせながら彼を猛烈
に見つめ語った。

「ああ！ パンダヒーロー！ 新聞であなたの勇氣ある
行動を知ってどれほどの衝撃を受けたことか！ どれほ
ど勇氣つけられたことか！」

「ミスター・シャロープ……ヘンリー」

「パンダヒーロー！ あなたの前では僕の思いや信念な
どつまらないものかもしれません！ ですが僕も亦あな
たと共にあると思います、聞いてください！ あなたが恋人
を傷つけられ憤るように、僕もまたあの男達への許しが
たい感情に満たされているのです！ だって、だって……
：僕の父はクロスの命令で、あのイーサン・カーターに
殺されたのですから！」

ジョッシュの身が、着ぐるみの中で強張った。しばらく
くは心の隅に置いていたイーサン・カーターの姿が、突
然鮮やかに浮かんだ。

「僕の父は、所謂クロスの敵対者でした……」

ヘンリーが白い頬に涙を這わせながら言った。

「父はこの町に住んでいた有力な商人で、クロスに匹敵
するほどの財産を持っていました。ですが、あの男のよ
うに卑しい所は少しもなく、僕は父のことが大好きでし
た。だけど、そんな父もクロスの命令一つで永久に奪わ
れました。ベッドで父にお休みを言われ寝入っていると、
外が何やら騒がしい気がして出て行っただけです！ そし
たら……そしたら、父さんが頭を撃ち抜かれて倒れ込ん
でいました。そしてその背後に、黒髪の美しい青年がい
ました。それが、イーサン・カーターでした！」

ヘンリーは頬に伝う涙を乱暴に掴みつぶした。群衆の
中からすすり泣きが聞こえてきた。

「それからどうしたのかは覚えていません！ 気づけば
僕は教会の一室で目を覚ましました。ええ、この街に一
つだけある、あのヴィシユヌ街の教会です！ そこで、
母を幼いころ無くし、父までも失ってしまった僕は、そ
の教会の優しい牧師様に育てられました。牧師様は大変
な慈愛でもって、僕に接してくださいました。感謝して
もしきれません。ですが、牧師様の全てを受け入れられ
たわけではありませんでした。あの方は怒りを忘れなさ
いと言いましたが、それだけはできませんでした！ 僕
のこの怒りこそ、恨みこそ僕を形作るものです！ これ
なしでは生きられないのです！ 僕は父を殺したロボー
ト・クロス、そしてイーサン・カーターへの怒りによつ
て生きると決めたのです！ そうして生きるうちにミ
ス・ドーキンスに、今ここに居るみんなに出会ったので
す！」

ヘンリーの手が、パンダヒーローの手を掴んだ。

「そしてあなたに出会いました、パンダヒーロー！ あ
なたの言葉を信じます！ あなたの行動を勇氣を正しさを
信じます！ ミス・ドーキンスや僕のように彼への怒
りで満たされた人々がここにはいます！ その誰もが、
あなたを信じているのです！」

パンダヒーローはヘンリーの手にそっと自分の手を添
えた。ジョッシュの心の中にあつた、イーサンの姿は揺
らぎながらも消えてった。あの優しい瞳も、濡れた幼い
顔も、くるくると抑揚の変わる声も、もう深い奥底に沈
んでいった。

（カーターさん。本当なんだね、カーターさん……）

頭を大きく振ると、パンダヒーローは穏やかに目の前

の少年に語りだした。

「ああ、ヘンリー。君の過去も、ミス・ドーキンスの過
去もすっかりと子の胸に焼き付いています。そして私の
愛する恋人の過去も。そうです、よくわかります！ あ
なたの痛み、恋人の悲しみ、そして皆の辛さが私と同じ
ものです！」

パンダヒーローは左手に携えていた金属バットを高
く天上に付き上げた。ステッカーは剥がされていた。人々
が声を上げて一斉に左手を上げた。その声が、高く聳え
立った腕の林がジョッシュの細い体に強く絡みつき、そ
の背や腕や足を支えた。彼の体はもうその少年のもので
はなく、人々の叫びに、怒りに勇氣に溶け込んでいった。
その時、ふと右手に何か柔らかいものが触れた。厚い
着ぐるみ越しでも分かる、その柔らかさ。

「ミミミ？」

ミミはそっと立ち上がり、彼を見つめた。

「ジョッシュ……いいえ、パンダヒーロー」

そう静かに語った。

「私も一緒に戦います」

「ミミミ……！」

ジョッシュは臉を跳ね除けて叫んだ。その声に、群衆
ははつと声を止めた。

「一緒に戦うだって？ 分かっているの？ これは本当の

闘いなんだよ！」

「分かっているわ」

ミミは頭の芯まで冷え渡るかのような、静かで引き締
まった声で答えた。その顔に銃を向けられ怯えていた女
の子の面影はなかった。

「パンダヒーロー。これは世間知らずな女の子がその場
で思いついたことを言ってるんじゃないわ。もう私は決

めました。あなたと初めて会ったあの昼下がりから、ずっと私はあなたの物だった。そして昨晚、本当に私はあなたと一緒にあった。あなたは私を、物品ではなく心の通う人として見つめたの。私も同じです。あなたは私と共にある。だからあなたの進む道は私の道。だからこそ、私はあなたを一人で行かせたりはしない」

「ミミ！」
不意にリーズが叫んだ。彼女は歩み寄ると、ミミの肩を強く掴んだ。

「おお、ミミ、急に何を言い出すの？ ねえ、少し考え直してちょうだい。私達はこれからとつても危ない戦いをするのよ？ あのロバート・クロスを倒そうとしているのよ？ ミミ、あなたはまだ子供で女の子じゃない！いくらなんでも、あなたを危険な目には合わせられないわ！」

「リーズ先生」

ミミは肩に置かれた手を取って、そつと外した。
「言ったでしょ？ もう決めたことなの。もちろんこれがただの遊びじゃなくて、本物の闘いだってことは分かってる。これからもっと怖い思いをするってことも分かってるわ。それでも彼と同じ道を進みたいの。私はもう彼なしでは考えられないの」

ミミは、その幼い顔に似合わぬ、美しく大人びた笑顔を浮かべた。

「だって、愛しているんですもの」
ミミは歩を進ませ、パンダヒーローの隣に立った。その立ち姿は自身と誇りに溢れ、まるで狩猟と英知の女神のようにも見えた。

「みなさん、聞いてください」
人々は、パンダヒーローに向けたものと同じ視線を少

女に向けた。

「私は長年ロバート・クロスの道具でした」

ミミが静かに話し出した。

「物心ついた時から、私は彼らに育てられていました。ロバート・クロスは私に最高の教育、最高の礼儀作法を、このミス・ドーキンスを通して私に与えてくれました。それでも、あの頃は何不自由なく生活しながらも心は空虚で、花にも季節にも胸躍らずまるで死んだように生きていました。ロバート・クロスもイーサン・カーターも、あの美しい顔の他には何も表には出しませんでした。もちろん分かっていました。例えばどんなに目を凝らしても、その優美な姿の内側には、ただ薄ら寒く錆び切った心の他には何も見いだせないだろうと。だから、あの二人に子供なら当たり前で与えられる父や兄のような愛情を求めることなど、もうとつとくに諦めていました。それは、あのヴァルナのビルで働く従業員やメイドにも同じことでした。あの時の私の心の支えは、リーズ先生の優しい声と、どこで手に入れたのかもわからない綺麗な小物達だけでした」

女性の一人が目の縁に浮いた涙を手巾で押さえた。男達は悔しそうに下を向いた。ヘンリー・シャローブが強く拳を握った。

「そしてとうとうロバート・クロスは私を物として決定づけました。私は暗殺業の前金としてあそこを追い出されました。あの人は私をミミではなく、使えそうな金銭としてだけ見ていたのだと、私ははっきり確信しました。なら、私の意志や気持ちはどうなるの？ そう何度にも心に思いました」

そしてミミは暗く沈み込んでいた顔を上に向けた。窓から差し込んだ陽光が、その顔を明るく照らした。

「だけど、よく考えてみれば、それがロバート・クロスがしてくれた、唯一のいい事でした。そのおかげで、私はパンダヒーローに出会えたんだもの。そうです。この人はあの二人とはまるで違った。金銭として渡されたに過ぎない私の、こんな私なんかの名前を聞き、私の事を聞き、冷たい視線の代わりに抱擁とキスを与えてくれました。私達はたちまち恋に落ちて、お互いを深く愛しました。私の意志も思いも全ては彼の下にあるとはつきり自覚しています。だからこそ、彼と私の道は同じです。彼が戦いの道を行くなら、私も共に生きます！」

ミミが勢よく手を髪にやり、そのお下げ髪を一気に解いた。きつちりと縛り付けられた髪がふわりと空気に舞い、赤銅色に輝きながらミミの背を包み込んだ。

「ええ、みなさん！ 私は決めました！ 私はみなさんと同じようにロバート・クロスに利用され貶められました！ でも、もうそれも終わりだわ！ 次は私とパンダヒーローとみなさんの番です！ どうか私に銃を教えてください！ 彼とみなさんと戦えるように！ どうか私を彼と同じように信じてください！」

「これぞまさしく革命の乙女だ！」

人々の中でもひと際若く年層が歓声を上げた。ヘンリー・シャローブは頬を紅潮させながら、熱狂的な目で二人をうつとりと見つめた。

「ミミ！ あなたはこんなに年若いにも関わらず、愛にまっすぐ生きるのですね！ なんて美しく気高い魂だろう！ まるでジャンヌ・ダルクかラクシュミー・バयीが目の前に現れたようだ！ ええ、ミミ！ もちろん僕達はあなたを歓迎しましょう！ 老いも若きも、富んでいる者も貧しい者も、男も女もみなともに戦いましょう！」

さらに強い声が一塊となつて彼らを包み込んだ。その声は、熱情は、人々をあまねく包み、その腕に抱きこみ勇気と熱意を平等に与えた。窓ガラスを震わせるその声は、やがてリーズの家を越えて街の中に届いていった。ゴミ箱を漁る少年の顔を、仕立てのいい服を着て朝刊を読む紳士に顔を上向けた。

熱狂の中、ミミとジョツシユは静かに見つめ合った。

(私も共に怖かった)

ミミは心の中で、彼に語りかけた。

(どれだけあの人達を憎んでも恨んでも嫌つても、本当に行いに移してしまうのは本当に怖かった。ずっと、あのチョコレートの香りが香っている気がして……。あなたもやっていたのと同じように、何かになるのが怖かった。だけど、無理矢理連れ戻されそうになって、これだけは分かった。どんな道が待ち受けていても、あなたと離れたくない。そしてあなたは、人質となった私の為にバットを捨てようとした。その時ようやく心は決まった。あなたのために正しいことをしよう。だから『従うな』と叫んだ。恐れることも迷うこともなく)

「愛してるわ。心から、心から愛してる」

その言葉はジョツシユにだけ聞こえた。ミミが口にした、初めての言葉だった。瑞々しく甘く、震える言葉。なのに、ミミはどこか懐かしいような気持ちを感じた。

「愛してるよ。心から、心から愛してる」

頭の奥底で、誰かの声が言った。熱狂する人々の声の中で、寄せては返す波のように、何度もミミに語り掛けた。

「愛してるよ。心から、心から愛してる」

リーズは遠い目をして、ミミを眺めていた。少し前まで、ロバート・クロス冷やかかな視線に怯えていた小さな女の子はそこにいなかった。リーズは手を白い額に置いて俯いた。

(あの子が銃を取る)

そう心の中に呟いた。

(つい最近まで臆病な女の子だったあの子が。銃を取って革命の乙女になる。あの子は変わったんだわ。私が知っているあの子はもうどこにもいないんだわ……)

ボブは憂鬱な気分職場から持ち帰った書類の整理をしていた。「六時には帰る」というイーサンからの電話を受け取ったボブは、辺りが暗くなるにつれイーサンの帰宅時間が迫っていることを感じたため息を付いた。イーサンは昨日、何でもフランスから一時帰国しているジョゼフィン・ベーカーの衣装の採寸のため、ニューヨークに出張している所だった。ジェフェリー達とは行き違いになったのだろう。

「うちの一人に有名人に顔がきく人がいてね。ジョゼフィン・ベーカーの衣装担当を相談された時にイーサンを推薦したのさ。偉いもんだよ。あんな有名歌手の衣装担当なんてパリやミラノにもそうそういないものねえ」

そう、ボブの母であるモナは太った体を揺すって笑いながら言っていた。

ボブは、机の脇に置かれた朝刊をじつとりと眺めた。朝刊、迫って来るイーサンの帰宅時間、暗くなる夕方、彼の生来陽気な性格を削ぎ落していた。

「あら、お帰りなさい、イーサン！」

突然、部屋の外で妹の明るい声がした。

「いよいよか……」

ボブは嘆息したが、極めて明るい顔を繕った。イーサンは手も洗わずにトレイシーを伴ってボブの部屋を真っ先にあげた。

「ただいま！」

「よう、おかえり！」

イーサンは嬉しそうにボブを抱擁した。都会の埃っぽい匂いが、香水の代わりに香った。

「ねえねえ、イーサン！ ニューヨークはどうだったの？ ジョゼフィン・ベーカーは？」

「ああ、これもすごいことばかりさ」

腰にまとわりつくトレイシーに微笑んで、イーサンは息を弾ませながら言った。

「証券取引所に自由の女神にタイムズスクエア！ それにエンパイアステートビル！ まだ建設中だったけど、それだけでワクワクするぐらいでね、おまけにどの建物もすっごく高いの！」

「わあ、いいなあ！ あたしも連れてって欲しかったのに！」

ムっとむくれるトレイシーの髪を撫でて、イーサンは優しく微笑んだ。その様子を見ると、ボブはますます胸が痛んだ。

「トレイシー。ちょっと兄さん達のためにお茶を用意してきてくれないか？ その後でみんなでおやつにしよう」

ボブがそう言うと、トレイシーは元気よく駆け出していった。

「楽しかったなあ」

イーサンは二人きりになると、椅子に掛けながら次はしみじみとため息を付いた。

「俺、今までこの街出たことなかったからさ。ニューヨ

ークやフィラデルフィアがどねえにすげえところかなんて思いも寄らんかった。向こうについても、俺は切符の買い方も知らなくて、一ぱい恥ずかしい思いしたつけ。そう考えるとき、そう考えると……今までの俺ってさ……

……

疲れと安心で緩み切っていたイーサンの目が、その時突然鋭くなった。灰色の静かな目が、一部の新聞記事に止まった。ボブの背に冷たい汗が一筋流れた。

「なんなんだ、これ……」

白く細い指が記事を持ち上げる。そして厳しい瞳がボブを睨んだ。

「どういことだ」

「書いてある通りさ……」

ボブは苦い顔で下を向いた。

「昨日あったことさ。旦那様の命令で中島さん達三人が、お嬢様を無理矢理連れ戻そうとした。そこにパンダヒーローが現れて暴動になった。そして彼は……」

「ロバート・クロスに対抗宣言をした」

「そういうことだ」

イーサンは新聞を叩きつけた。

「チクショウ！ こんなことってあるかよ！ こんなことって！ 結局失敗してるじゃねえか！」

「そつ、それが……」

口走ったものの、ボブは迷った。ところがイーサンが荒々しい顔を使って無言の圧力をかけた。ボブはしどろもどろになりながらも言った。

「そ、その三人に命令してパンダヒーローが反抗するよ、うに仕組んだのは旦那様なんだ……」

「は!!」

イーサンが勢いよくボブの肩を掴んだ。

「どういことだ!! じゃあ、あの人言った何考えて……!!」

「俺にだって分からないよ、そんなこと！」

イーサンがはっと目を瞬かせた。黒い髪ががっくりと下を向き、掠れた声が「ごめん」と言った。

彼はしばらく音もなく座り込んでいた。ボブはひたすらに、妹が駆け込んでくるのを待った。時計の秒針の音だけがやたらと響き渡った。

「あ」

突然、イーサンが声を上げた。驚いて顔を上げると、その灰色の瞳が大きく見開かれ、透明な涙が白い頬を無機質に伝っていくのが見えた。

「イーサン？ 大丈夫か？」

ボブがそつと細い肩に手をかけた。骨ばった肩がふるふると震えていた。

「なんでこんなことを……なんで……こういうことじゃなかったのに……」

ボブの胸に、イーサンは突然身を投げた。そして、いつかロバートに傷つけられた夜の時のように、大声で泣き出した。

「もう嫌だ！ もう嫌だ、こんなこと！ 大っ嫌い！ 大っ嫌い、あんな分らず屋！」

その日のロバート・クロスの態度は、客人を持って成すには最悪だと言えた。だらりとスーツを気崩し、椅子のひじ掛けの上で頬杖を突き、時々眠たそうに欠伸をする。

「ミスター・クロス！ 聞いていますか？」

とうとう客人が堪り兼ねて卓を拳で叩いた。ロバートは面倒くさそうにガクガクと頭を振った。今彼が相手に

しているのは、年若いながらも禁酒法と酒の密造で莫大な富を築いたシカゴマフィアの頭領、アル・カポネであった。

「まあ、大体。で、何の話でしたっけ？」

「ですから！」

カポネは卓の上から身を乗り出して言った。

「私とあなたで密造の協力をしあおうというのです！」

「はあ、お酒のね……」

「ええ！ 正直なところ、うちで扱っている酒はどうも業者がケチるのか、物が悪くあまり売れませんでな。そこでです。あなたの所のビールやワインは随分と評判良しと聞いている頼みでしてね。あなたのお酒を私が一遍に買い取ってこちらで売ろうという了見です。何、悪い話じゃない。売上は勿論平等に折版しますから」

「それはどうも。でもあの質のいいお酒は私じゃなくてジョンの功績でしてね」

「……ジョン？」

「あー、間違えた。ヘイスティングスの功績でしてね」

カポネはしばらくいぶかし気にロバートを見つめていたが、やがてさつと表情を切り替えロバートの手を取った。

「ま、とにかく、ジョンだろうがヘイスティングスだろうが、あんな敗残の将のことなどどうでもいいでしょう。私はあなたのような成功者と話しがしたいのですからな」

「どうでもよくないですよ。努力家でしたから、ジョン……ヘイスティングスは。それからありがたいんですけど」

ロバートはさつとカポネの手を払った。

「そもそもうちはもう密造酒はやめたんです」

「なんですって!!」

カポネが宙に浮いたままの手を「とりと卓上に落とし
た。

「ええ、やめたんですよ。製造の利権は元ヘイスティン
グスの一派に返しましたし、違法賭博や麻薬製造の経営
も止しました。すでにどこのマフィア集団にもうちは繋
がっていませんよ」

「バカか、あんたは!!」

カポネが椅子を蹴飛ばして立ち上がった。

「収入源のほとんどを手放したってか!!」

「ええ、まあ。鉄鋼の仕事は残しましたがね」

「なんと愚かな！ 楽に早く稼げるものをみすみす逃す
とは！ 鉄鋼業なんてちまちましたもの、何の役に立ち
ますか！」

「確かにそうですが、カポネさん。私は未来を考えてい
るのですよ。目先の事に捉われてちや、前へは進めませ
ん」

ロバートは涼し気に言い終えると、次は皮肉な顔を作
った。

「それとも、私の体を使いたいから今日いらっしやった
のですか？ それならお試しになります？ 三日風呂に
入ってないのですがそれでもよろしければ」

「誰があんたみたいな古狐を！」

カポネが激昂して立ち上がり、荒々しくそばに立って
いた給仕から上着と帽子を取った。

「ええ、もう我慢が出来ん！ よくもまあ、この俺をコ
ケにしたもんだ！ いいですか、ミスター・クロス！
この取引に快く応じてくれれば、私もあなたを助けまし
たぞ！ 新聞を見たでしょう、パンダヒーローがあなた
に反したことを！ その内は奴らはあなたを廃しようとして
押し寄せますぞ！ その時の援助をもしこの取引が成立

すればあなたにやるつもりだったのです！ ですがあな
たは自分でそれを断りましたな！ ええい、もう知った
ことか！ あなたのことはもう金輪際助けませんから
な！ パンダヒーローに付いた方が数倍マシだ！」

カポネはそう言い残すとどかどかと音を立てて部屋を
出て行った。

「へーだ！ 行っちまえ、イキリ野郎！」

ロバートがおどけた声を出して、赤い舌をべえつと出
した。そして部屋に残っていた給仕の少年達に退出を命
じた。

彼らが一礼して出て行くと、ロバートは大急ぎで風呂
場に駆け込んだ。熱い湯を浴び、石鹸を使って髪と体を
洗い、顎にチリチリと生えていた髭を綺麗に剃った。大
急ぎで髪を拭い、櫛で梳き、仕立てのいいスーツを几帳
面に気、香水を耳たぶに振りかけた。そして最後の仕上
げに、あのチョコレート紙の包み紙を胸のポケットに入れ
た。

部屋に戻ると、肘掛け椅子をきつちりと整え、真ん中
の小卓の上にワインのボトルを一つ、グラスを二つ、水
差しを一つ置いた。

ロバートは時計をチラリと見ると、ほっと一息ついた。

(よかった、間に合った)

そして、包み紙の入った胸ポケットに手を当て、目を
そっと閉じた。

アン。愛しい俺のアン。許してください。あなたとの
思い出を、今人に打ち明けます。あなたとの優しい思い
出を、せめて永遠にしたいのです。

扉が開いた。彼の待ち人が定刻通り現れたのだった。
ロバートは深い青の目を一層深くして、その相手を眺め、
ゆっくりと椅子に腰かけた。

二人の間に重く、神秘的な沈黙が数分の間流された。
しかし、やがてロバートが口を開いた。
「ああ、よく来てくれた。さあ、座って寛いでくれ。そ
して静かに、私の話を聞いておくれ」

続く